

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

—県営半島基幹農道整備事業(草野2期地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

はま ば
浜 場 遺 跡
しも ぼり
下 堀 遺 跡

(草野2期)

2009年2月

鹿児島県志布志市教育委員会



浜坂遺跡　遠景

序 文

本市には多くの文化財が存在し、埋蔵文化財の包蔵地についても前川・安楽川・菱田川を中心にして 500ヶ所を超える多数の遺跡が確認されています。特に前川・安楽川沿いに縄文時代の遺跡が多いことから「縄文銀座」と称されるほどです。また一方で、志布志は古くから港町として栄え、交易の拠点、交通の要衝として繁榮し、麓地区には多くの武家庭園・寺院庭園が遺されています。これらの庭園のうち、天水氏庭園・平山氏庭園・福山氏庭園は「志布志麓庭園」として国指定名勝となり、鳥濱氏庭園と清水氏庭園は国登録名勝となっています。さらに、志布志をめぐる興亡の歴史を示す中世山城の志布志城跡も国指定史跡に指定されています。

この報告書は、志布志市教育委員会が主体となって、平成19年度において確認調査・全面調査を行った成果をまとめたものであります。

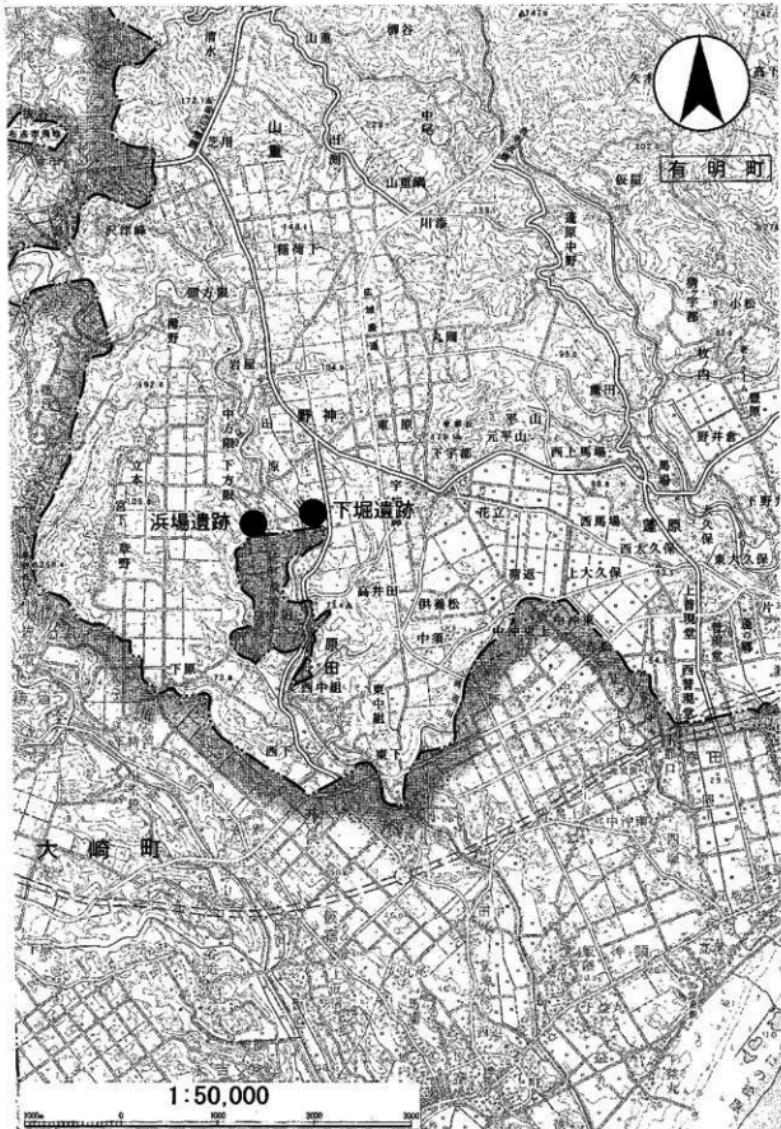
調査の結果、下堀遺跡からは遺物・遺構は確認されませんでしたが、浜場遺跡からは主に縄文時代早期、古墳時代の遺物・遺構が確認されています。

この発掘調査の成果が、今後の研究資料として活用されるとともに、広く文化財愛護思想の啓発普及等、地域の文化財として活用され、文化財に対する理解を一層深めることができます。

最後に、発掘調査に従事していただいた住民の方々をはじめ、現場における調査から出土資料の整理・報告書の刊行に至るまでご指導・ご協力いただきました県教育委員会文化財課をはじめとする各関係機関、その他、多くの先生方並びに関係者の方々に深く感謝申し上げ、刊行の序文といたします。

平成21年2月吉日

志布志市教育委員会
教育長 坪田勝秀



浜場遺跡・下塙遺跡の位置

例　　言

- 1 本報告書は、半島基幹農道整備事業 草野2期地区の事業実施に伴い志布志市教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
 - 2 発掘調査は、鹿児島県農政部の委託を受けて志布志市教育委員会が実施した。
 - 3 浜場遺跡の調査は、確認調査・全面調査を平成19年度に行った。下堀遺跡の調査は確認調査のみ平成19年度に行った。整理作業・報告書作成は平成20年度に行い、鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターに指導・助言を得た。
 - 4 採図の縮尺は、各図面に示した。
 - 5 発掘調査における写真撮影は出口順一朗（志布志市教育委員会）が行い、遺構図面の作成は川ノ上真理・安野美子・山元弓枝（志布志市教育委員会）が行い、一部遺構実測を㈱埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。なお、遺跡周辺地形の空中写真撮影はふじた航空写真に委託した。
 - 6 発掘作業の実施にあたっては、周辺地権者のご理解と地元作業員のご協力により円滑に行うことができた。
 - 7 整理作業を川ノ上真理、安野美子、山元弓枝（志布志市教育委員会）で行った。
 - 8 本調査では自然科学分析として樹種同定、放射性炭素年代測定（AMS法）を株式会社古環境研究所に委託し分析結果を第VI章に掲載した。
 - 9 本報告書の執筆・編集は出口が行った。
 - 10 本報告書に用いた地図は旧有明町及び志布志市所有のものを使用した。
- 1.1 発掘調査・整理作業並びに報告書作成に際しては、以下の方々にご指導・ご教示を得た。記して感謝を申し上げたい。
- 池畠耕一　瀬榮久志　中村耕治　長野眞一　青崎和憲　吉岡康弘（以上　鹿児島県立埋蔵文化財センター）　堂込秀人（鹿児島県教育庁文化財課）　中村直子（鹿児島大学）　小村美義　相美伊久雄　大庭祥晃（以上　志布志市教育委員会）
- 1.2 出土遺物の管理・保管は志布志市教育委員会で一括して取り扱い、今後文化財の啓発・普及に活用したい。

凡　　例

- 1 本報告書に用いたレベル数値は、鹿児島県農政部が提示した事業実施計画図面の数値に基づくものである。
- 2 本報告書の土色・土器の色調について、数字及び英字で表記されているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 2001年版」に準じて表記している。
- 3 遺物番号・各遺構番号は全て通し番号とし、本文及び挿図・図版中の番号と一致する。
- 4 周辺遺跡一覧に表記してある番号は「周知の埋蔵文化財包藏地」として登録されている遺跡番号と対応する。
- 5 浜場遺跡の確認調査遺物の遺跡名表記は「ハマバ 草2 碓」、全面調査遺物の遺跡名表記は「ハマバ 草2」である。注記の略号は SK=土坑、T=トレンチ、ヒヨウサイ=表面採集を用いている。
- 6 平板による遺物取上げを行った包含層遺物は便宜的に用いた調査区（例 1-1区、1-2区等）で出土位置を注記している。
- 7 遺構の長軸方位は南北方位では北を、東西方位では西を基準にして文章中で表現している。また、文章中にある遺構の方位の解釈は以下のとおりである。
例) N 6° E → 北から東方向に 6° ずれる
- 8 図面上にある遺物マークについては、下記のとおりに分類した。

縄文早期土器	×	成川式土器	△	土師器	▲
須恵器	☆	近世陶器	◆	石器	◎
石	○	焼石	●	炭	・
- 9 図中の方位は一部で磁北を使用している。磁北の場合は「MN」と標記している。
- 10 土器観察表中に表記してある胎土の分類については、肉眼観察によるものである。胎土の分類標記は下記の略号を用いている。
「石・長」→石英・長石　　「雲」→雲母　　「角・輝」→角閃石・輝石
「疊」→小疊　　「赤」→赤褐色粒　　「砂」→砂粒
なお、「小疊」については直径 2mm 以上の粒状のもの、「砂粒」については直径 2mm 未満の粒状のものを指す。

浜場遺跡・下堀遺跡 梶原文化財発掘調査報告書 目次

巻頭カラー図版
序文
浜場遺跡・下堀遺跡の位置
例言・凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯と經過.....	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の組織	
第Ⅱ章 遺跡の位置及び構造.....	3
第1節 志布志市の概要	
第2節 地形的環境の概要	
第3節 遺跡周辺の歴史的環境	
第Ⅲ章 浜場遺跡 評価調査の概要.....	7
第1節 試掘調査の方法	
第2節 試掘調査の概要	
第Ⅳ章 浜場遺跡 確認調査の概要.....	8
第1節 確認調査の方法	
第2節 層位	
第3節 確認調査の概要	
第4節 出土遺物	
第Ⅴ章 浜場遺跡 全面調査の概要.....	13
第1節 全面調査の方法	
第2節 全面調査の概要	
第3節 浜場遺跡 層位	
第4節 確認調査の成果	
1. 楽文時代早期の調査	
2. 古墳時代の調査	
3. その他	
第VI章 浜場遺跡における自然科學分析.....	68
第1節 土坑2出土の炭化材分析	
第2節 土坑3出土の炭化材分析	
第VII章 下堀遺跡 確認調査の概要.....	74
第1節 確認調査の方法	
第2節 層位	
第3節 確認調査の概要	
第VIII章 浜場遺跡・下堀遺跡 調査のまとめ.....	75
第1節 浜場遺跡 遺物	
第2節 浜場遺跡 連携	
第3節 下堀遺跡 まとめ	
報告書抄録	

第Ⅰ章	
第1回 浜場遺跡・下堀遺跡 周辺地形図.....	3
第2回 浜場遺跡・下堀遺跡 周辺遺跡位置図.....	5
第Ⅱ章	
第3回 浜場遺跡 試掘調査 トレンチ位置図.....	7
第Ⅳ章	
第4回 浜場遺跡 確認調査 出土遺物.....	9
第5回 浜場遺跡 確認調査 トレンチ位置図 及びトレンチ柱状図.....	11
第6回 浜場遺跡 遺跡範囲図.....	12
第Ⅴ章	
第7回 浜場遺跡 調査範囲図.....	13
第8回 浜場遺跡 グリッド設定図.....	14
第9回 浜場遺跡 遺物出土状況 全体図.....	15
第10回 浜場遺跡 1-1・3区 IX-d層上面 遺構検出状況図.....	17
第11回 浜場遺跡 3区 IX-a層上面 遺構検出状況図.....	18
第12回 浜場遺跡 集石1 平面・断面図.....	19
第13回 浜場遺跡 集石2 平面・断面図.....	20
第14回 浜場遺跡 集石3・4 平面・断面図.....	20
第15回 浜場遺跡 集石1・2・3・4 及び 炭化物集中地点1・2・3・4 遺構配図図.....	21
第16回 浜場遺跡 IX-b層上面 集石及び炭化物集中地點 配置及び石器・繩・焼け出土状況図.....	22
第17回 浜場遺跡 炭化物集中地點5 遺構配図図.....	26
第18回 浜場遺跡 炭化物集中地點2・3 平面・断面図.....	27
第19回 浜場遺跡 炭化物集中地點1 平面・断面図.....	28
第20回 浜場遺跡 楽文時代早原土器 遺物出土状況 全体図.....	30
第21回 浜場遺跡 楽文時代早原土器 1.....	34
第22回 浜場遺跡 楽文時代早原土器 2.....	35
第23回 浜場遺跡 楽文時代早原土器 3.....	36
第24回 浜場遺跡 IX-a層出土 石器出土状況 全体図.....	37
第25回 浜場遺跡 IX-a層出土 石器 1.....	38
第26回 浜場遺跡 IX-a層出土 石器 2.....	39
第27回 浜場遺跡 IX-a層出土 石器 3.....	40
第28回 浜場遺跡 IX-a層出土 石器 4.....	41
第29回 浜場遺跡 鹿立柱建物1 平面・断面図.....	46
第30回 浜場遺跡 1区 VI層上面 遺構検出状況図.....	47
第31回 浜場遺跡 2区 VI層上面 遺構検出状況図.....	48
第32回 浜場遺跡 3区 VI層上面 遺構検出状況図.....	49
第33回 浜場遺跡 庚 1 全体図.....	50
第34回 浜場遺跡 庚 1 平面・断面図 1 (炭化面除去後).....	51
第35回 浜場遺跡 庚 1 平面・断面図 2 (1・2 T部分).....	52
第36回 浜場遺跡 庚 1 平面・断面図 3 (1・2 T部分).....	53
第37回 浜場遺跡 庚 1 平面・断面図 4 (2・3・4・5 T部分).....	54
第38回 浜場遺跡 庚 1 平面・断面図 5 (5・6・7 T部分).....	55
第39回 浜場遺跡 庚 1 平面・断面図 6 (7・8・9 T部分).....	56
第40回 浜場遺跡 庚 1 遺物出土状況図.....	57
第41回 浜場遺跡 土坑2・3・4 遺構配置図.....	58
第42回 浜場遺跡 土坑2 平面・断面図.....	59
第43回 浜場遺跡 土坑3・4 平面・断面図.....	60
第44回 浜場遺跡 成川式土器 遺物出土状況全体図.....	62
第45回 浜場遺跡 成川式土器・土師器・須恵器・石器 近世陶器・現代遺物.....	63
第46回 浜場遺跡 成川式土器・土師器・須恵器・石器 近世陶器・現代遺物.....	64
第VII章	
第47回 下堀遺跡 確認調査 トレンチ位置図 及びトレンチ柱状図.....	75

表

第五章	
第1表 洋場遺跡・下堀遺跡・周辺遺跡一覧	6
第IV章	
第2表 洋場遺跡 確認調査 IX-a・IX-b層出土 土器觀察表	10
第3表 洋場遺跡 試掘調査・確認調査 III層出土 土器觀察表	10
第4表 洋場遺跡 確認調査 表土採集土器觀察表	10
第V章	
第5表 1-1・3区 IX-d層上面検出 柱穴計測表	17
第6表 3区 IX-d層上面検出・柱穴計測表	17
第7表 洋場遺跡 集石1 出土種類調査(1)	23
第8表 洋場遺跡 集石1 出土種類調査(2)	24
第9表 洋場遺跡 集石2 出土種類調査(1)	24
第10表 洋場遺跡 集石2 出土種類調査(2)	25
第11表 洋場遺跡 集石3 出土種類調査	25
第12表 洋場遺跡 集石4 出土種類調査	25
第13表 洋場遺跡 繪文早期土器觀察表(1)	43
第14表 洋場遺跡 繪文早期土器觀察表(2)	44
第15表 洋場遺跡 繪文早期土器觀察表(3)	45
第16表 洋場遺跡 第X群 繪文早期土器表	45
第17表 洋場遺跡 IX-a層出土 石器觀察表	45
第18表 1区 VII層上面検出 石穴計測表	48
第19表 2区 VII層上面検出 石穴計測表	48
第20表 3区 VII層 上面後出 石穴計測表	48
第21表 洋場遺跡 備立柱建物1 計測表	49
第22表 洋場遺跡 底1出土 土器觀察表	57
第23表 洋場遺跡 IV層上面検出土坑 計測表	59
第24表 洋場遺跡 成川式七器觀察表(1)	66
第25表 洋場遺跡 成川式上器觀察表(2)	67
第26表 洋場遺跡 III層出土 烏形土器觀察表	67
第27表 洋場遺跡 土師器・須恵器 土器觀察表	67
第28表 洋場遺跡 III層出土 石器計測表	67
第29表 洋場遺跡 近世陶器 土器觀察表	67
第30表 洋場遺跡 宋代遺物觀察表	67

答 算

第六章	
写真1 洋場遺跡の農化村	73

図 版

図版1 洋場遺跡 試掘調査・洋場遺跡・下堀遺跡 確認調査	
図版2 洋場遺跡 集石	
図版3 洋場遺跡 底1	
図版4 洋場遺跡 備立柱建物・土坑	
図版5 洋場遺跡 遺物出土状況・土層断面	
図版6 洋場遺跡 繪文早期土器(1~VI群)	
図版7 洋場遺跡 繪文早期土器(VII~IX群)	
図版8 洋場遺跡 IX-a層出土 石器	
図版9 洋場遺跡 成川式土器	
図版10 洋場遺跡 成川式土器・土師器・須恵器・石器 近世陶器・現代遺物	

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

鹿児島県農政部農地建設課及び農地整備課（大隅地域振興局農林水産部曾於支所、以下「県農整課」）は、草野2期地区において半島基幹農道整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財包蔵地の有無について鹿児島県教育委員会文化財課（以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けて鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」）と有明町教育委員会社会教育課（当時 現「志布志市教育委員会生涯学習課文化財管理室」）が平成16年3月に埋蔵文化財分布調査を実施したところ、事業区内に遺物散布地として、浜場遺跡が存在することが判明した。

この分布調査の結果をもとに県農整課、県文化財課、志布志市教育委員会文化振興課（当時 以下「市文化振興課」 現「志布志市教育委員会生涯学習課文化財管理室」）は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下「確認調査」）を実施することとなった。確認調査は県文化財課の指導・助言を受けて、志布志市教育委員会（以下「市教育委員会」）が調査主体となり、平成19年7月17日から8月16日にかけて実施した。確認調査の結果、浜場遺跡において事業対象区域内に縄文時代早期・古墳時代の遺物包含層が存在することが判明した。

この結果を受けて、遺跡の取扱いについて県農整課、県文化財課、市文化振興課で協議を行い、農道整備事業の推進にあたって遺跡の現状保存は困難であると判断されたため、平成19年11月19日から平成20年3月7日にかけて埋蔵文化財が存在する範囲の全面発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の組織

〔確認調査・全面調査〕 平成19年度

調査主体者 志布志市教育委員会

調査責任者	〃	教 育 長	坪 田 勝 秀
調査事務局	〃	教 育 次 長	上 村 和 繁
	〃	文 化 振 興 課 長	米 元 史 郎
	〃	文 化 振 興 課 長補佐	森 重 祐 一
	〃	文 化 財 係 長	小 村 美 義
	〃	主 査	出 口 順 一 朗
	〃	主 査	大 雅 伸 晃
	〃	主 事	松 元 友 美
	〃	主 事 捕	上 集 一 樹
調査担当者	志布志市教育委員会	主 査	出 口 順 一 朗

遺物指導 鹿児島大学 埋蔵文化財調査室 准教授 中 村 直 子

〔確認調査作業員〕

大迫 亨 小平光子 鈴木綱枝 田迫チヅ 谷口チエ 谷口モギ 田渕孝夫
長竹健次 鍋 サチ 萩迫ユミ 村久木マサ子 持永ハツ子 用皆サダ子

(以上 社団法人志布志市シルバー人材センター)

〔全面調査作業員〕

有馬タエ 井之上徳満 大迫 亨 岡村エチ子 片山スズエ 桑畠 弘 小平光子
重永ヒデ 鈴木綱枝 園田信夫 嶽タエ子 田迫チヅ 田渕孝夫 谷口モギ 長竹健次
鍋 サチ 前田寛明 村久木マサ子 森 勇 森山敬子 山中善次郎 山脇八重子
吉満 孝 用皆サダ子 吉井弘子

(以上 社団法人志布志市シルバー人材センター)

〔報告書作成〕 平成20年度

組織再編に伴い、文化振興課と生涯学習課の統合により、文化振興課文化財係を生涯学習課に移管し、生涯学習課に文化財管理室を置く。

調査主体者 志布志市教育委員会

調査責任者	〃	教 育 長	坪田 勝秀
調査事務局	〃	生涯学習課長	小辻一海
	〃	文化財管理監	米元史郎
	〃	文化財管理室長	竹田 孝志
	〃	埋蔵文化財係長	小村 美義
	〃	主任 主査	出口順一朗
	〃	主 査	大庭 祥晃
	〃	主 事 補	相美伊久雄
	〃	主 事 補	上集一樹
調査担当者	志布志市教育委員会	主任 主査	出口順一朗

報告書作成・整理作業従事者

川ノ上真理 安野美子 山元弓枝 (市生涯学習課文化財管理室臨時職員)

遺物注記・接合・復元 川ノ上真理 安野美子 山元弓枝

遺物実測・トレース 安野美子 山元弓枝

遺物拓本 安野美子

遺物撮影 吉岡康弘 (県立埋蔵文化財センター)

出口順一朗

遺物撮影補助 山元弓枝 (市生涯学習課文化財管理室臨時職員)

石器実測委託従事者

高橋 亨 藤山聖子 小野田真子 森口美佐 池ノ上智美

(以上 倫理文化財サポートシステム鹿児島支店)

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

第1節 志布志市の概要

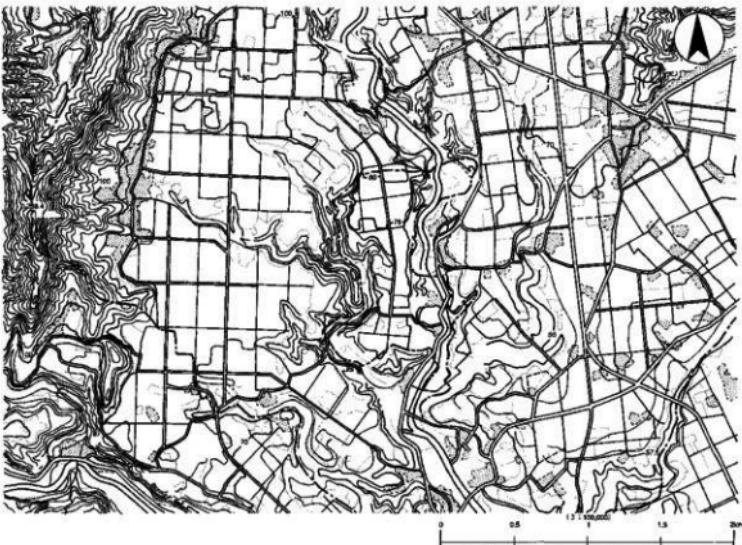
志布志市は鹿児島県大隅半島の東部、志布志湾奥のほぼ中央に位置し、東部は宮崎県串間市、西部は大崎町、北部は曾於市と境をなしその一部は宮崎県都城市と接している。東西に約 23 km、南北に 18 km の扇形の区域をなし、総面積は 290 km²であり、大崎町内に 1.02 km² の飛地を有している。

南部の志布志湾沿岸部一帯は、昭和 30 年 6 月 1 日、日南海岸国定公園の一部として指定された沖合約 4 km の志布志湾のほぼ中央に浮かぶ枇榔島（周囲 4 km 面積 17.8ha）は亜熱帯性植物群落が国の特別天然記念物に指定されている。市の気候は温暖多湿な土地であり、緯度からみれば亜熱帯に近い暖帯の位置にあり、夏から秋にかけて台風の襲来と豪雨による多雨地帯でもある。

第2節 地形的環境の概要

市周辺の地形は、全体として志布志湾に向かって緩やかな勾配となっており、平野部が極端に少なく、標高 100m のあたりから大きく南部の台地と北部の山岳・丘陵地帯に二分される。

南部の台地は安楽川・菱田川・田原川・肝属川などの諸川によって開析される標高約 20~100m の火山噴出物の台地（シラス台地）が広がり、「原（ばる）」と表現される、比較的平坦な台地が見られる。この台地を南北に貫流する河川に菱田川があり、この沿岸に河岸段丘が形成されている。この河岸段丘は三段階の段丘に大別され、第三段丘面は明治から昭和にかけて先人たちの開墾による野井倉



第1図 浜場遺跡・下堀遺跡 周辺地形図

開田・蓬原開田が拓がり、広域に跨る稻作地帯となっている。

北部から東部にかけては標高 100m のあたりから山岳地帯となり、宮田山（標高 520m）をはじめ、霧岳（標高 408m）、御在所岳（標高 530m）などの山岳・丘陵地帯が広がる地域で、中世層を基盤として準平原化の後、周囲の台地が形成されたものといわれ、山地の開析は相当に進み、火山灰台地面を除いてほとんど平坦を残していないため、起伏の多い丘陵が連なっている。そのため山岳・丘陵地帯の集落はこれまで谷間に点在していた。台地上においては地下水位がシラス下部の深い位置にあり、第三段丘面は集落等の形成が困難で開田以前まではほとんど利用されず、シラス下部あるいは降下軽石層を流动する浅層地下水の露頭される段丘面の末端(崖脚)からの自然湧水の有無が集落立地の重要な因子であった。なお、市の総面積の約 55.0% は山林で占められ、耕地の占める割合は約 23.6% となっている。

浜場遺跡・下堀遺跡は市南部の火山灰台地の田原川沿いの台地上にあり、この台地は菱田川西岸の第三段丘面の一部にあたる通称「野神原（のがんばる）」の西端部（標高約 80m）に立地する。

第3節 遺跡周辺の歴史的環境

浜場遺跡・下堀遺跡の周辺には複数の遺跡及び古墳群が存在する。（第2図）

平成 14 年度に同遺跡の隣接地を、同事業の農道整備事業が起因となる埋蔵文化財全面調査が実施された。この調査では下堀遺跡 [127]において前平式、吉田式、倉庫 B 式、石坂式、下剥峯式、桑ノ丸式、手向山式、塞ノ神式、右京西式土器の縄文時代早期前葉から後葉にかけての土器及び集石等の遺構、弥生時代早期の刻目突帶文土器等が確認された。特にサツマ火山灰層上面において 36 基の炉穴（連穴土坑）が検出され、その炉穴の一部には遺構の下部にシミ状痕跡が見られるものが確認されている。浜場遺跡 [128]においては、サツマ火山灰層直上より石礫及び剥片等の石器が多数出土し、石礫製作跡と思われる直径 3 m の範囲内の集合分布が 3ヶ所認められた。またサツマ火山灰層上面において住居と思われる堅穴状土坑 1 基が検出された。下堀遺跡の北に平成 9・15 年度に全面調査を行った穴倉遺跡 [117] があり、平成 9 年度の調査では弥生時代・古墳時代の土器が多数確認されている。平成 15 年度の調査では石坂式、下剥峯式土器等の縄文時代早期の土器及び 2 基の集石、池田湖テフラ上面において 9 基の掘立柱建物が確認されている。浜場遺跡・下堀遺跡が立地する台地の下を流れる田原川沿岸には、小規模ながら古墳群が複数存在し、岩屋古墳群 [71]、中方限古墳群 [72]、渡迫古墳群 [73] 等が確認されている。

【参考文献】

- 牛ノ井 錠・中村昇一・佐保久志：1995 「佐良遺跡・山原遺跡」 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（1） 有明町教育委員会
出口勝一・佐保久志・佐久人：2002 「佐良遺跡・山原遺跡」 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2） 有明町教育委員会
牛ノ井 錠・中村昇一・佐保久志：2004 「下堀遺跡」 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（5） 有明町教育委員会
牛ノ井 錠・中村昇一・佐保久志・木下 肇：2004 「浜場遺跡」 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（6） 有明町教育委員会
山口照一郎・牛ノ井 錠・佐保久志・横手治二郎・喜多 雄志：2005 「佐良遺跡（1～3区）」 有明町教育委員会
牛ノ井 錠・喜多 雄志・山元英太・下原義三・栗林文丈・佐保久志・和田らみ子・木下 肇：2008 「佐明町内遺跡」 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（1） 有明町教育委員会
有明町教育委員会
山口照一郎・牛ノ井 錠・木下 肇・中村昇一・佐保久志・喜多 雄志・山元英太・下原義三・栗林文丈・佐保久志・和田らみ子・木下 肇：2009 「佐明町内遺跡」 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2） 有明町教育委員会
有明町教育委員会
牛ノ井 錠・喜多 雄志・木下 肇・中村昇一・佐保久志：2009 「上路八幡跡・六舟寺遺跡」 志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（1） 志布志市教育委員会
志布志市教育委員会
1990 「有明町誌」 有明町教育委員会



第2図 浜場遺跡・下堀遺跡周辺遺跡位置図

第1表 浜場遺跡・下堀遺跡 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
22	牧原A	野神字牧原・高尾・中牧	台地	繩(後)	磨製石斧・打製石斧	
42	塚堀	原田字塚堀・下原	台地	繩・歴	土師器	
50	古池	野神字古池・高尾	台地	弥(中)	磨製石斧・打製石斧	
51	清水	原田字清水	台地	弥(中)	打製石斧・磨製石斧	旧遺跡名 元宮の下・永田
65	長田	原田字長田	台地	弥・古 中世	山ノ口式・成川式 磁器・竪穴住居跡 櫛立柱建物跡	平成8年度分布調査 平成10年度確認調査 平成11年度全面調査 有明町埋蔵文化財発掘 調査報告書(2)
70	山神ノ上古墳	野神字後平	台地	古	円墳	
71	岩屋古墳群	野神字河内・井手元	台地	古	円墳3基	
72	中方隈古墳群	野神字穴倉	台地	古	円墳	
73	渡迫古墳群	野神字岩道	台地	古	円墳	
74	高井田古墳群	原田字下原	台地	古	円墳1基・方墳1基	
85	原田古墳	原田字大塚・出口・牧	台地	古	円墳5基・方墳1基	(町)昭44. 4. 1
115	長塚古墳	野神字岩道・立下	台地	古	円墳	
117	穴倉	野神字穴倉	台地	繩(早) 弥・古	石坂式・下剥峯式 成川式	平成6年度農政分布調査 平成9年度全面調査 平成12年度確認調査 平成15年度全面調査 志布志市埋蔵文化財発掘 調査報告書(1)
127	下堀	野神字下堀・立山	台地	繩(早) 弥・古	前平式・吉田式 倉闈B式・石坂式 下剥峯式・桑ノ丸式 手向山式・押型文 塞ノ神式・右京西式 成川式・集石・土坑	平成8年度農政分布調査 平成11年度確認調査 平成14年度全面調査 平成19年度確認調査 有明町埋蔵文化財発掘 調査報告書(6)
128	浜場	野神字浜場	台地	繩(早) 古	辻タイプ・石鐵 成川式・堅穴状遺構 連穴土坑	平成8年度農政分布調査 平成11年度確認調査 平成14年度全面調査 平成19年度確認調査 平成19年度全面調査 有明町埋蔵文化財発掘 調査報告書(6)
135	大堀	野神字大堀・水喰	台地	古・古代		平成10年度農政分布調査
136	上原	原田字上原	台地	古		平成10年度農政分布調査
137	立山	原田字立山	台地	古		平成10年度農政分布調査
138	東中原	原田字東中原・大塚	台地	古		平成10年度農政分布調査
139	廣迫	野神字廣迫・中岡	台地	古		平成10年度農政分布調査
140	渡迫	野神字渡迫・岩道・薗田	台地	古代	土師器	平成11年度農政分布調査
141	牧原B	野神字牧原	台地	古		平成10年度農政分布調査
142	水喰	野神字水喰・蓬原字山ノ後	台地	古代		平成10年度農政分布調査
143	山ノ前	蓬原字山ノ前	台地	古		平成10年度農政分布調査
145	丸岡A	野神字丸岡・中ノ丸	台地	古		平成10年度農政分布調査
146	風穴	野神字風穴・五色	台地	古		平成10年度農政分布調査
147	上五敷	原田字上五敷・五色	台地	古		平成10年度農政分布調査
148	五色	野神字五色・風穴	台地	古		平成10年度農政分布調査
149	西ノ堀	原田字西ノ堀・下五敷	台地	古		平成10年度農政分布調査
151	丸岡B	野神字丸岡 蓬原字楠原・山ノ後	台地	古		平成10年度農政分布調査
152	楠原B	蓬原字楠原・山ノ後・屋部当	台地	古		平成10年度農政分布調査
168	鹿藤	伊崎田字鹿藤・二反田	台地	繩		平成11年度農政分布調査
202	下原	原田字下原	台地	古		平成10年度農政分布調査
203	大塚	原田字大塚・出口	台地	繩・古		平成8年度農政分布調査
204	浜場A	野神字浜場	台地	古代		平成15年度農政分布調査

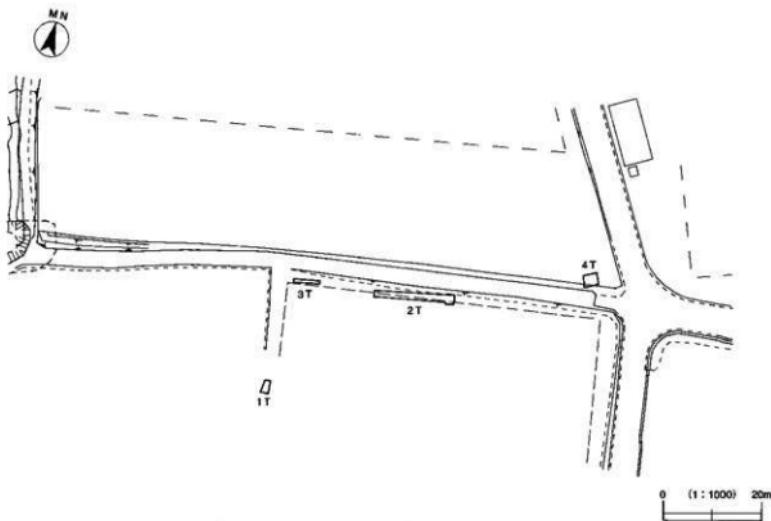
第Ⅲ章 浜場遺跡 試掘調査の概要

第1節 試掘調査の方法

試掘調査は、事業対象区域内の埋蔵文化財の有無を確実に把握するために、平成19年4月27日、5月1日の2日間で実施された。事業対象区域内の任意の地点に4トレンチを設定して実施した。調査は調査員立会いのもと、表土層を重機で除去した後、遺物が確認された層から作業員による掘り下げを行った。

第2節 試掘調査の概要

遺物出土は4Tから確認された。古墳時代の遺物包含層に相当すると思われるⅢ層から成川式土器21点が確認された。遺構は2・3Tから確認され、2Tよりアカホヤ層上面において柱穴5基、3Tより2T同様アカホヤ層上面において柱穴2基が確認された。また層位的判断からは、1Tは土層改良により搅乱を受けており、2・3Tについても一部に土層改良による搅乱が見受けられた。4Tについては遺物包含層の上層にやや削平が見られたが、層の残存状況は良好であった。これらのことから事業対象区域内に埋蔵文化財が包蔵されていることが確実になり、その遺跡範囲の特定と未調査部分の埋蔵文化財の有無については、一定期間を設けて確認調査を実施することとなった。



第3図 浜場遺跡 試掘調査 トレンチ位置図

第IV章 浜場遺跡 確認調査の概要

第1節 確認調査の方法

確認調査は、遺跡の性格と範囲を把握するために、事業対象区域内の任意の地点に5トレンチを設定して実施した。トレンチの規模は2m×3mを基準とし、調査員立会いのもと表土、火山灰層を除去した後、作業員による掘り下げを行った。包含層の残存状況は全体的に良好であったが、一部で削平が見られた。

第2節 層位

確認調査時の標準土層は下記のとおりである。

層位	層色	土質・特徴
I層	褐色 [10YR4/1]	表土層。層中に白色 [N9/0] テフラ（直径2mm程度）を含む硬質土層。
II層	黒色 [5Y2/1]	層中にテフラ・バミスの類を含まない締まった層。
III層	黒褐色 [2.5Y3/2]	層中に微細な暗灰黄色 [2.5Y5/2] 粒子を多含する締まった層。古墳時代の遺物包含層と思われる。
IV層	黒褐色 [2.5Y3/1]	遺構検出面。層中にV層に含まれるバミスの浮き上がりが見られる締まった層。
V層	オリーブ黒色 [5Y3/1]	明黄褐色 [10YR6/6] バミスが層全体に浮遊する締まった層。
VI層	黒色 [5Y2/1]	層中にテフラ・バミスの類を含まない締まった層。
VII層	オリーブ黒色 [5Y2/2]	通称 池田湖テフラ (Ik)。淡黄色 [2.5Y8/4] テフラ（直径1cm程度）が層の上位にあり、その下位は粘性のある硬く締まった層が堆積する。
VIII層	明黄褐色 [10YR6/8]	通称 鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah)。層の下位に5~10mmの大黄橙色 [10YR7/8] テフラが層を成す。
IX-a層	黒褐色 [2.5Y3/1]	層中にテフラ・バミスの類を含まない硬く締まった層。縄文時代早期の遺物包含層と思われる。
IX-b層	黒色 [5Y2/1]	層中に黄橙色 [10YR7/8] バミスを含む硬く締まった層。縄文時代早期の遺物包含層と思われる。
IX-c層	黒色 [5Y2/1]	層の様子はIX-b層に似るが、層中のバミスの含有が多く、比較的硬い層。IX-b層との分層が出来ない場合もある。
IX-d層	オリーブ黒色 [5Y3/2]	IX-c層に比べて層中のバミスの含有が減り、層全体に渦りが見られる層。
X層	にぶい黄橙色 [10YR6/3]	通称 サツマ火山灰層 (Sz-S)。かなり硬化して締まった層。層の上位にサツマ火山灰層の2次堆積が一部見られる。
X I層	暗赤褐色 [2.5YR3/3]	粘性がありローム化した層。
X II層	灰赤色 [2.5YR4/2]	粘性がかなり強いローム化した層。
X III層	にぶい赤褐色 [2.5YR4/3]	X II層に比べて比較的粘性が弱いがローム化した層。

XIV層	橙色 [7.5YR6/6]	XIII層に比べて粘性が弱い層。
XV層	明黄褐色 [10YR6/6]	粘性がほとんど見られないサラサラとした層。
XVI層	橙色 [7.5YR6/6]	シラスの2次堆積層と思われ硬く締まった層。

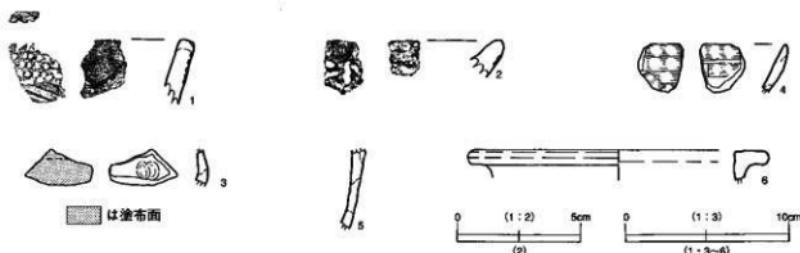
第3節 確認調査の概要

遺物出土は全てのトレーニングから確認された。1・2・4Tより、古墳時代の遺物包含層に相当すると思われるIII層から成川式土器46点が確認され、3～5Tより縄文時代早期の遺物包含層に相当すると思われるIX-a層から土器4点及び焼石を含む破碎繰15点が確認された。

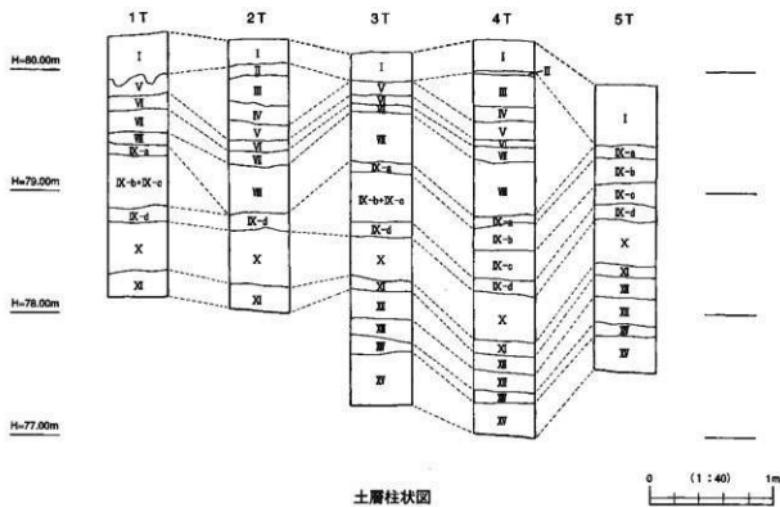
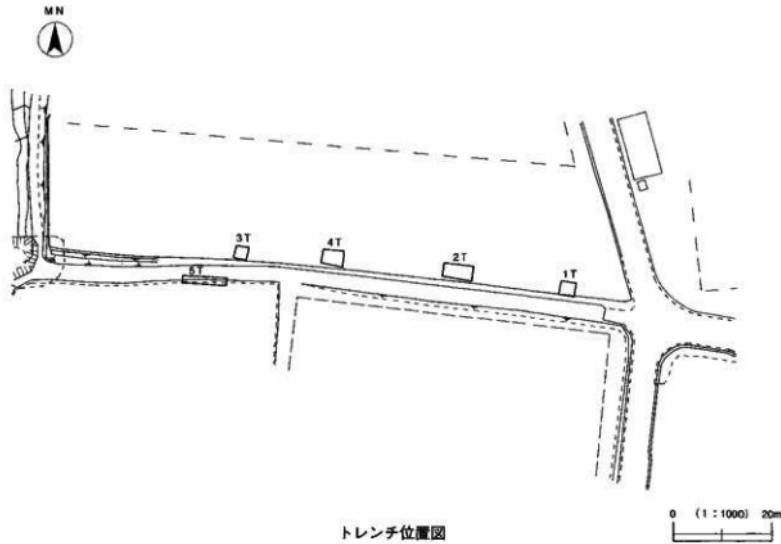
遺構は1～4Tから確認された。2TよりIV層上面において炭化物を伴う土坑1基、1TよりVII層上面において柱穴1基、3TよりIX-b層上面において集石1基、4TよりX層上面において柱穴5基が確認された。

調査の結果、事業対象区域の東西に分かれて大きく2つの遺物包含層が確認され、1・2・4T（事業対象区域東側）付近に古墳時代、3～5T付近（事業対象区域西側）に縄文時代早期の遺物包含層が存在することが判明した。また検出状況から遺構の分布についても遺物包含層と同様に東西に分かれている可能性が推測された。

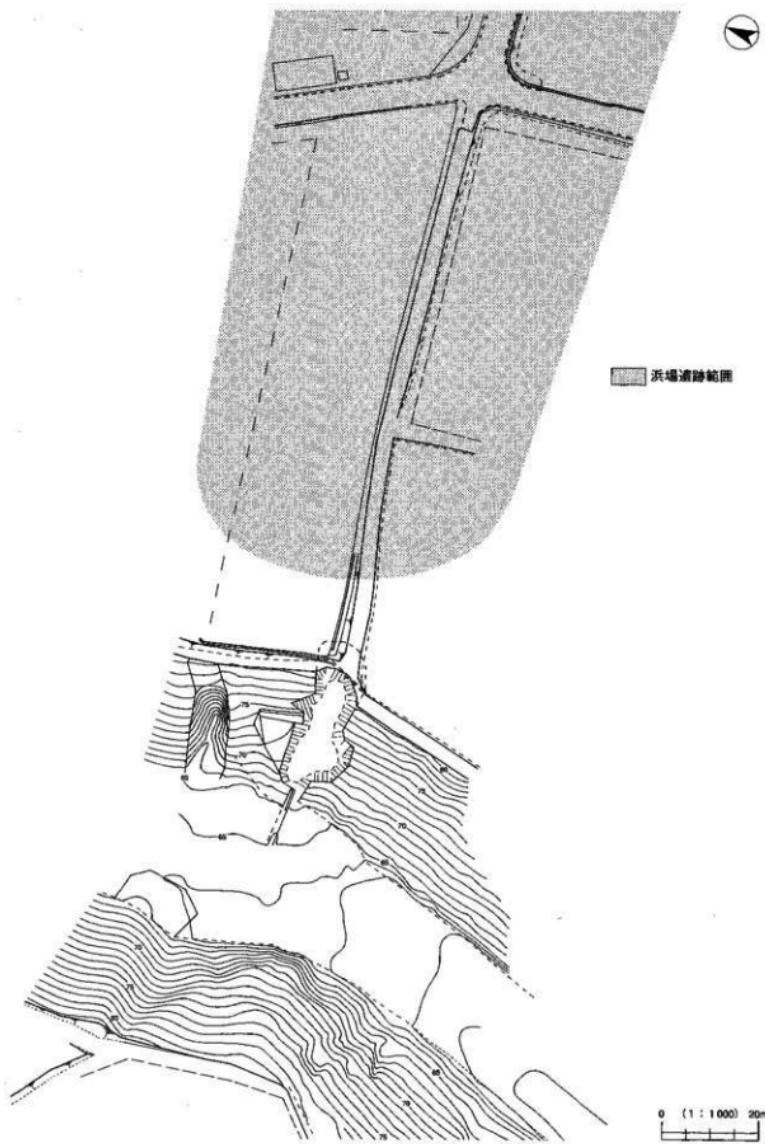
なお、事業対象区域の最西端は迫地形の上端部であるが、近年の自然災害により元の地形を20m程抉るような形で崩落しており、雨天時においても崩落する危険性があったため、トレーニングを設定すること出来なかった。崩落した断面を観察する限りでは、事業対象区域の最西端の迫地形の上端部は、過年の構造改善事業により押し出された土砂の盛土であった。またその盛土の部分から5Tに向かっては土層の残存は確認でき、追に向かっての層の傾斜が認められた。



第4図 浜場遺跡 確認調査 出土遺物



第5図 浜場遺跡 確認調査 トレンチ位置図及び土層柱状図



第6図 浜場遺跡 遺跡範囲図

第V章 浜場遺跡 全面調査の概要

はじめに

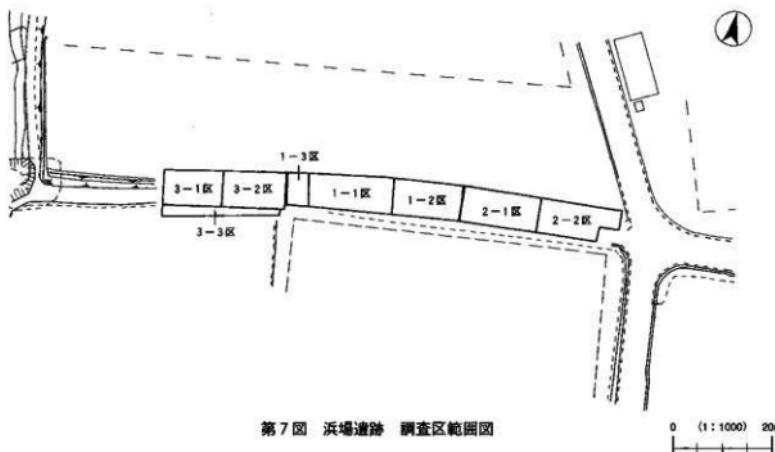
全面調査にあたり、表土層を調査員立会いのもと重機で除去し、その下層から人力による掘り下げを行った。IV層上面でⅢ層と思われる埋土を含んだ遺構の検出を行い、さらにⅦ層上面（池田湖テフラ層）まで人力で掘り下げを行った。Ⅷ層上面で遺構検出を行い、再度確認のためⅨ層（鬼界アカホヤ火山灰層）上面でも遺構検出を行った。Ⅹ層を調査員立会いのもと重機で除去し、IX-a～IX-d層を人力による掘り下げを行い、調査の過程で層位毎の遺物の出土量等から判断し、IX-b・d層・X層（サツマ火山灰層）上面で遺構検出を行った。

第1節 全面調査の方法

全面調査はD-7区付近から調査区に沿って東側に向って調査を進め、調査の進捗に伴って随時調査範囲を設定した。調査区は延長距離約93m、幅約8mの未舗装農道であり、その周りは耕作途中の畠地であるため、調査によって通行できなくなった畠地への迂回路を設置しながら「1-1区」「1-2区」「1-3区」「2-1区」…と便宜的に呼称し、調査の進捗にあわせて、一定の範囲を区切りながら調査を行った。（第7図）また、調査区内の任意の起点から方位に応じた5m×5mのグリッドを設定し、西から東へ1～21区、北から南にA～G区の記号・番号を付し、「A-1区」「B-1区」…と呼称した。（第8図）

第2節 全面調査の概要

全面遺跡は、立地的には東側に田原川を見下し、西側には小谷地形（迫谷）が見られる。遺跡の南北は「野神原」と呼ばれる比較的平坦な台地が広がっているが、これは近年の耕地整備により丘の削平と迫の埋め立てにより平坦化したものと思われ、野神原の旧地形を



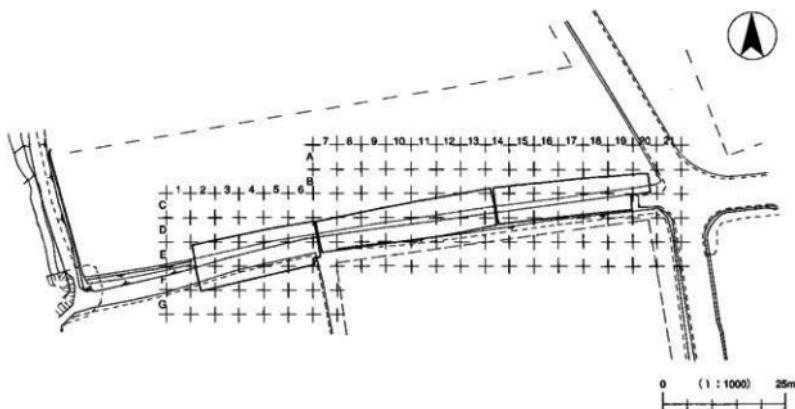
第7図 浜場遺跡 調査区範囲図

ることは困難である。今回の調査により、調査区付近に限定した場合、旧地形は土層柱状図（第5図）から迫のある西側に向かって下るのではなく、南東側に向かって緩やかに下る地形であることがわかり、また調査区西側にあたる3区側は古墳時代の包含層であるⅢ層が削平を受けており、3-1区の中央を頂点にして調査区西側は迫の傾斜に近くよう下ると思われる。

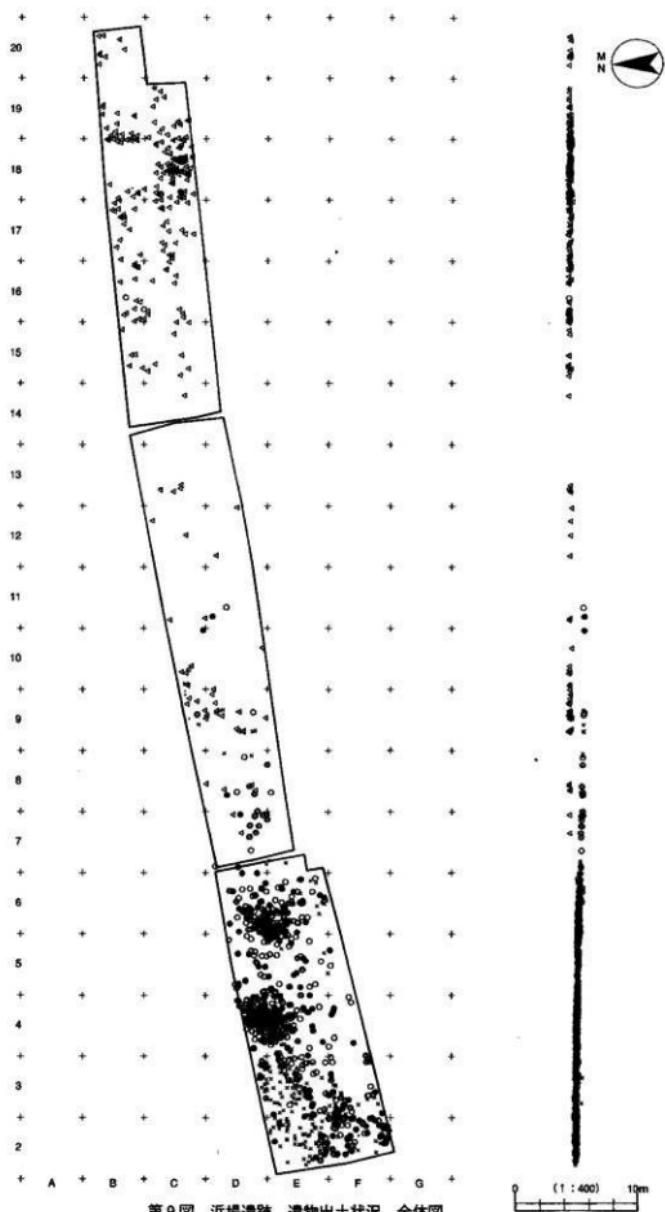
遺構は、IV層上面よりC-10区、D-9~13区、E-9・10区の広範囲で大型の溝状遺構が1基、B・C-14区、B-18・20区より炭化物を伴う土坑が3基検出された。VII層上面よりC-13・14区の範囲で1間×1間の掘立柱建物1基、B-14~18・19区、C-10~12・15~19区、D-5・10~15区、E-5~9区の広範囲で柱穴42基検出された。IX-b層上面より、D・E-4~6区で集石4基が狭い範囲で確認され、集石が検出された範囲に、多数の土器・石器・破碎砾が出土した。またE-2~4区、F-2・4・5区、D-9・10区に土坑や掘り込みを伴わない一定範囲に炭化物が集中して出土する地点（以後「炭化物集中地点」と呼称）が5基確認された。この炭化物集中地点からは微細な剥離片もほぼ同レベルで確認されている。IX層上面ではC-9・11・12区、D-6・8~11区、E-2・3・5・6区の広範囲で柱穴37基が検出された。なお、X層上面では新たに検出される遺構は確認できなかった。

遺物は、III・IV層及びIX-a・b層で出土した。III層が古墳時代の遺物包含層と思われ、D・E-7区より東側の範囲に遺物包含層が残存していた。III・IV層からは成川式土器271点、土師器1点、須恵器1点、磨石1点等が確認された。IX-a・b層からは縄文時代早期相当の土器215点及び打製石鏃7点、姫島産の黒曜石を含む剥片41点等が出土した。第9図で見ると、調査区全体の遺物分布は、時期により調査区の東西で大別でき、遺物分布からみた古墳時代の遺跡範囲が調査区の東端にあたるB・C-15~20区に、縄文時代早期の遺跡範囲は調査区の西端にあたるD~F-2~8区を主として広がることが分かった。

(第9図)



第8図 浜場遺跡 グリッド設定図

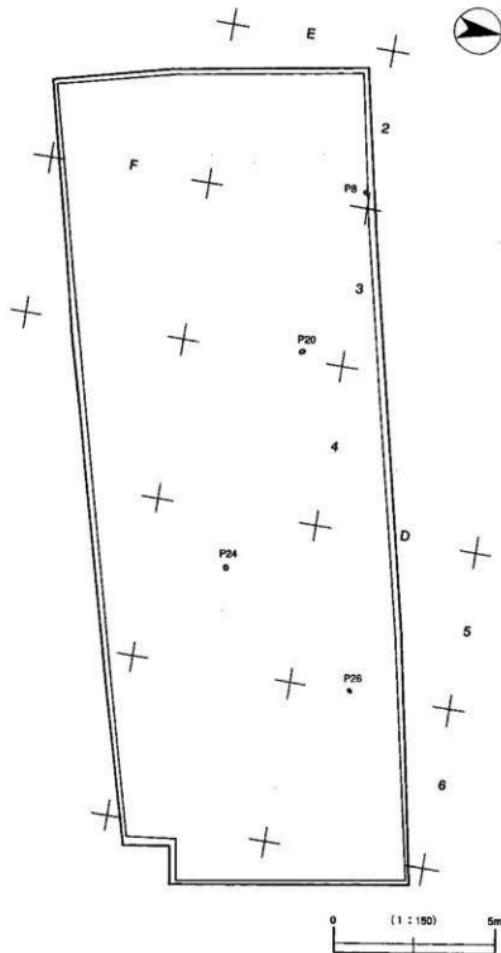


第9図 浜場遺跡 遺物出土状況 全体図

第3節 浜場遺跡 層位

全面調査の標準土層は下記のとおりである。

層位	土色	土質・特徴
I層	褐色 [10YR4/1]	表土層。層中に白色 [N9/0] テフラ（直径2mm程度）を含む硬質土層。
II層	黒色 [5Y2/1]	層中にテフラ・バミスの類を含まない層。
III層	黒褐色 [2.5Y3/2]	層中に微細な暗灰黄色 [2.5Y5/2] 粒子（バミス？）を多含する縮まった層。古墳時代の遺物包含層。
IV層	黒褐色 [2.5Y3/1]	遺構検出面。一部に下層のバミスの浮き上がりが見られる縮まった層。
V層	オリーブ黒色 [5Y3/1]	明黄褐色 [10YR6/6] バミスが層全体に浮遊する縮まった層。
VI層	黒色 [5Y2/1]	層中にテフラ・バミスの類を含まない縮まった層。
VII層	オリーブ黒色 [5Y2/2]	遺構検出面。通称 池田湖テフラ層 (Ik)。淡黄色 [2.5Y8/4] テフラ（直径 1 cm 程度）が層の上位に、その下位は粘性のある硬く縮まった層が堆積する。
VIII層	明黄褐色 [10YR6/8]	遺構検出面。通称 鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah)。かなり硬く縮まる層。層の下位に5~10mm大の黄橙色 [10YR7/8] テフラが層を成す。
IX-a層	黒褐色 [2.5Y3/1]	層中にテフラ・バミスの類を含まない硬く縮まった層。縄文時代早期後葉の遺物包含層。
IX-b層	黒色 [5Y2/1]	層中に黄橙色 [10YR7/8] バミスが層全体に浮遊するように含む硬く縮まった層。
IX-c層	黒色 [5Y2/1]	層の様子はIX-b層に似るが、層中の黄橙色 [10YR7/8] バミスの含有が多く比較的硬い層。場所によりIX-b層との分層が出来ないところも見られる。
IX-d層	オリーブ黒色 [5Y3/2]	遺構検出面。IX-c層に比べて層中のバミスの含有が減り、層に渦りが見られる。
X層	にぶい黄橙色 [10YR6/3]	遺構検出面。通称 サツマ火山灰層 (Sz-S)。かなり硬化して縮まった層。層の上位にサツマ火山灰の2次堆積層が一部見られる。
X I層	暗赤褐色 [2.5Y3/3]	粘性がありローム化した層。
X II層	灰赤色 [2.5YR4/2]	粘性がかなり強いローム化した層。
X III層	にぶい赤褐色 [2.5YR4/3]	X II層に比べて比較的粘性が弱いローム化した層。
X IV層	橙色 [7.5VR6/6]	X III層に比べて粘性が弱い層。
X V層	明黄褐色 [10YR6/6]	粘性がほとんど見られないサラサラとした層。
X VI層	橙色 [7.5YR6/6]	シラスの2次堆積層と思われ硬く縮まったく層。



第11図 浜場遺跡 3区 IX-d層上面
遺構検出状況図

層程度積み重なるように検出された。出土礫は主に角礫で破碎した状態であり、最大で

しての判断を行った。そのため半裁段階で柱穴番号の欠番が生じている。また、調査の進捗の関係から大調査区の1区・3区ごとで柱穴番号を設定したため、第5・6表に見られるように柱穴番号の表記が重なる。

柱穴はC-10・11区、D-5・7~10区、E-2・3・5区で37基検出された。柱穴毎の計測値については第5・6表に述べる。検出された柱穴は、形状は円形若しくは橢円形であり、長径の平均値は17.45cm、深さの平均値は27.6cmを測る。柱穴の検出分布は調査区東側に主に広がり、西側に向かうに従い、遺構密度が疎になる傾向がある。

(2) IX-b層上面検出遺構の調査

IX-b層の遺構検出範囲は3-1~3区の範囲で行った。IX-a層の掘り下げを行った際、焼石を含めた破碎礫が散石状に多数確認され、その直下から集石4基が確認された。破碎礫・焼礫と集石との位置関係は第16図に付す。

ア 集石

①集石1(第12図)

集石1はE-4区で検出された。礫密度は密で、集石を構成する礫は275個確認され、出土礫の総重量は39978.6g、長径120cm、短径105cmの橢円形を呈する範囲内に、大小の礫が不規則に3

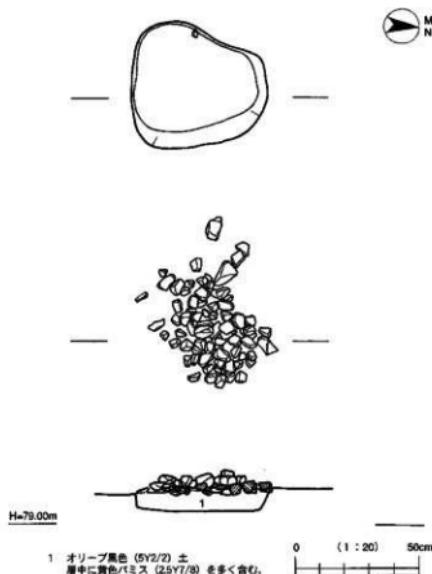


第12図 浜場遺跡 集石1 平面・断面図

も長径が 132.27 mm、重さ 736.21 g を測り、出土礫の平均重量値は 145.37 g を量る。礫の一部に赤みを帯びているものも見られ、集石内に炭化物は微量ながら確認されたが、焼土等は確認出来なかった。また集石の直下より 102cm×85cm を測る楕円形の掘り込みが礫の集中部分に重なるように検出され、上部の集石を構成する同様の小礫が掘り込み内に落ち込んでおり、集石との関連性があると思われる。

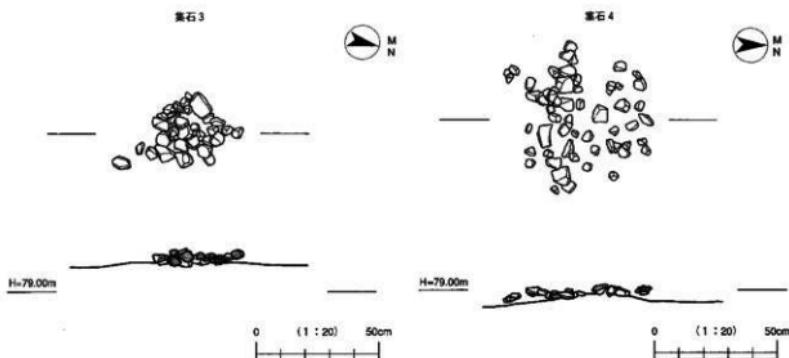
②集石2（第13図）

集石2はD・E-4区で検出された。礫密度は密で、集石を構成する礫は91個確認され、出土礫の総重量は 9079.6 g、長径 70 cm、短径 58 cm の楕円形を呈する範囲内に、大小の礫が不規則に 3 層程度積み重なるように検出された。出土礫は主に角礫で破碎した状態であり、最大でも長径が 116.17 mm、重さ 456.18 g を測り、出土礫の平均重量値は 99.77 g を量る。集石内に炭化物や焼土等は確認出来なかった。また集石の直下より 55 cm×51 cm を測る楕円形の掘り込みが礫の集中部分に重なるように検出された。しかし掘り込み内には礫の落ち込みは確認出来ず、集石と掘り込みとは別の造構の可能性も否定できない。



第13図 浜場遺跡 集石2 平面・断面図

59 cmの梢円形を呈する範囲内に、大小の礫が不規則に積み重なるように検出された。出土礫は主に角礫で破碎した状態であり、最大でも長径が 82.79 mm、重さ 199.13 g を測り、出土礫の平均重量値は 62.38 g を量る。集石内に炭化物や焼土等は確認出来ず、掘り込みも見られない。



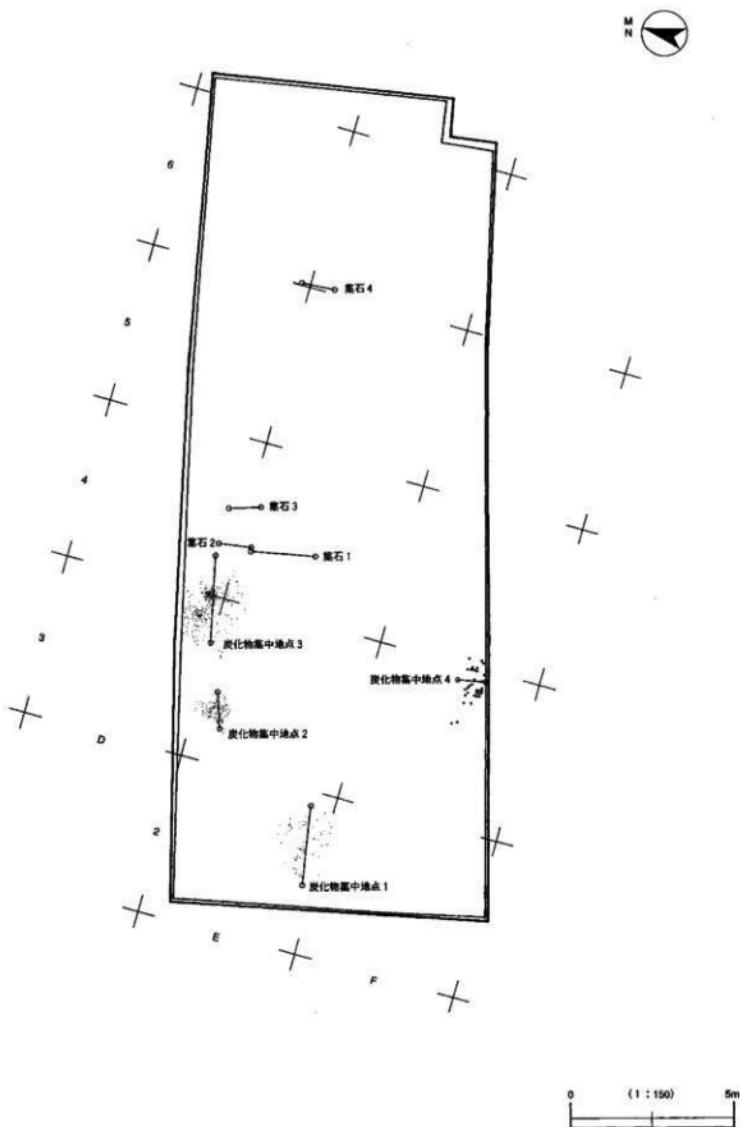
第14図 浜場遺跡 集石3・4 平面・断面図

③集石3（第14図）

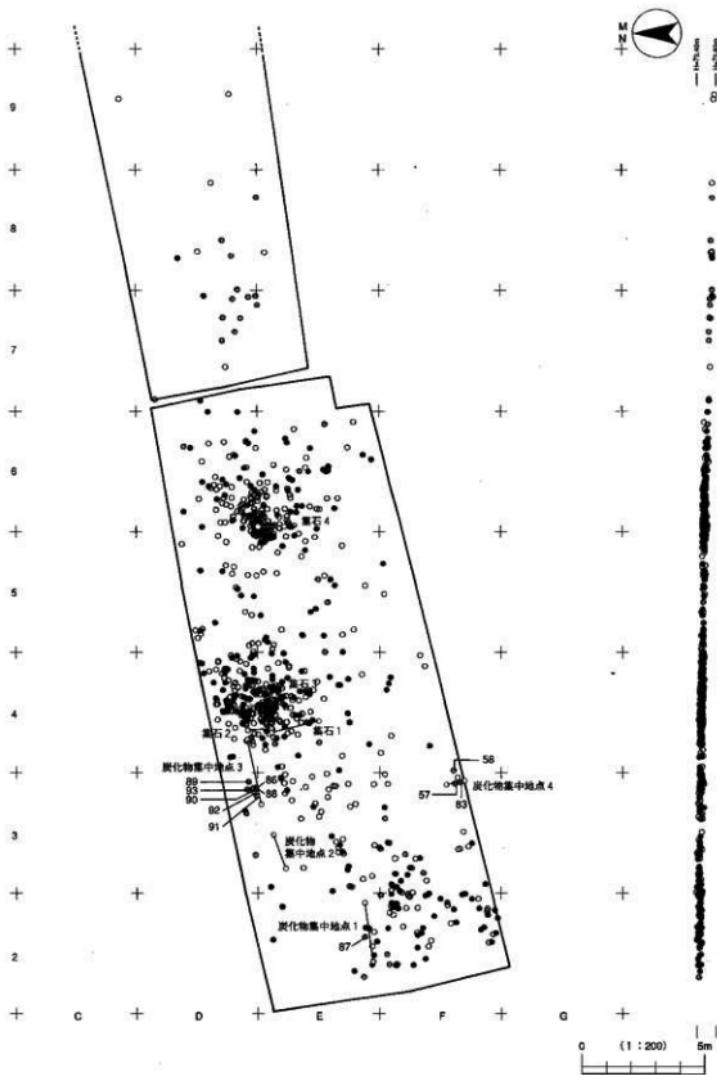
集石3はD・E-4区で検出された。礫密度は密で、集石を構成する礫は34個確認され、出土礫の総重量は4064.03 g、長径55 cm、短径31 cmの梢円形を呈する範囲内に、大小の礫が不規則に積み重なるように検出された。出土礫は主に角礫で破碎した状態であり、最大でも長径が88.55 mm、重さ400.05 gを測り、出土礫の平均重量値は119.53 gを量る。集石内に炭化物や焼土等は確認出来ず、掘り込みも見られない。

④集石4（第14図）

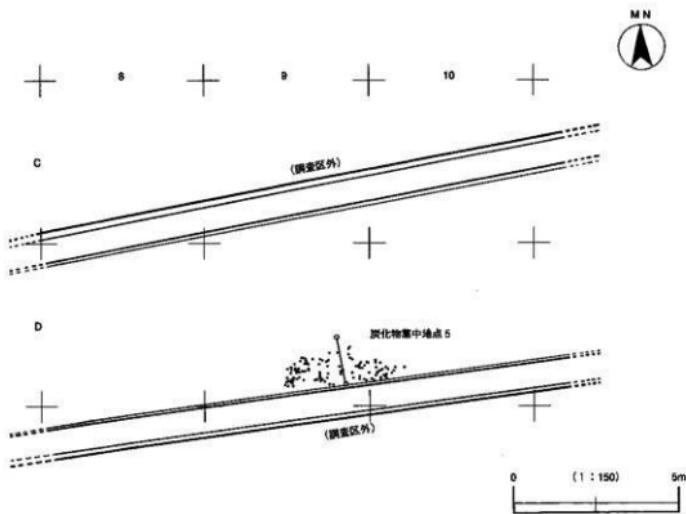
集石4はD・E-5・6区で検出された。礫密度は疎で、散石状に礫が散らばる。集石を構成する礫は34個確認され、出土礫の総重量は4397.52 g、長径68 cm、短径



第15図 沼場遺跡 集石 1・2・3・4 及び炭化物集中地点 1・2・3・4
遺構配置図



第16図 浜場遺跡 IX-b層上面 集石及び炭化物集中地点配置及び石器・礫・焼石出土状況図



第17図 浜場遺跡 炭化物集中地点5 遺構配置図

イ 炭化物集中地点

IX-b層上面において、炭化物集中地点が5基検出された。この遺構から出土している炭化物は直径2~3mm程度の微細なものであり、その炭化物出土の範囲内からは石匙未製品(57)、石核(58)、剥片(83)及び剥離片(86~93)が出土している。

①炭化物集中地点1 (第19図)

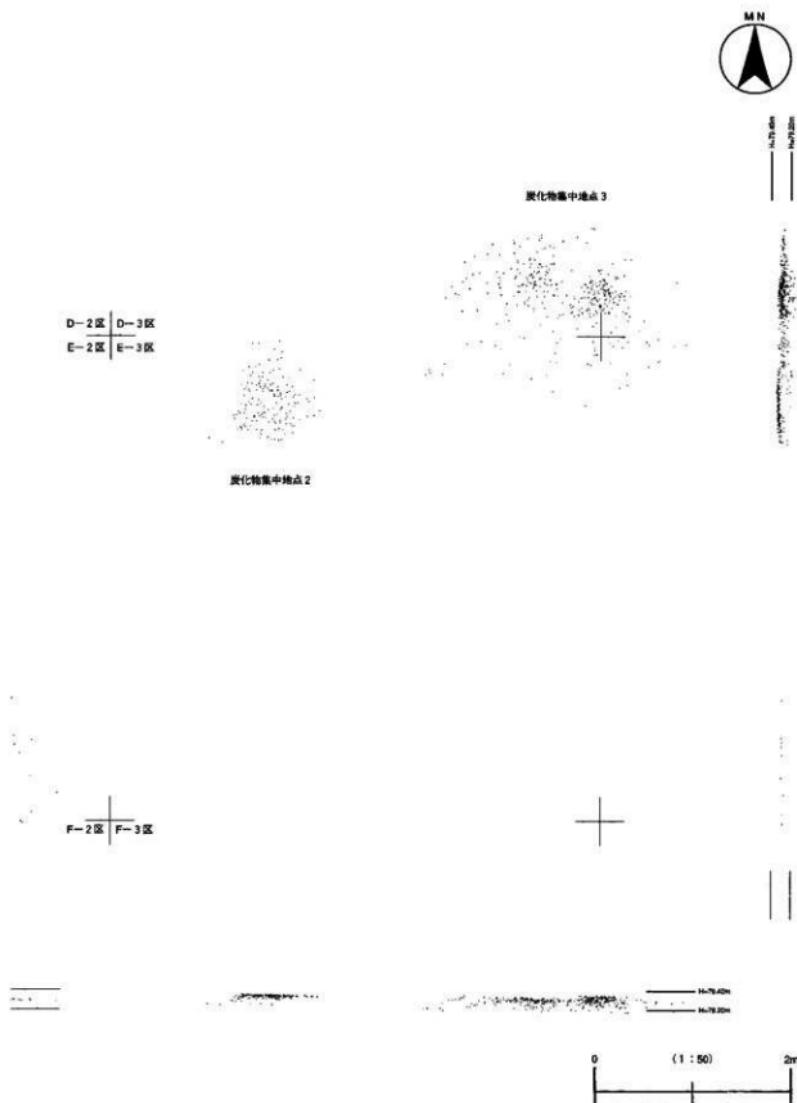
炭化物集中地点1はE・F-2区に検出された。炭化物の平面分布は約1m×0.8mの梢円形の範囲内にやや疎な状態で広がり、水平分布は検出面とほぼ同一レベルに出土した。また炭化物の出土が認められた範囲内のほぼ中心に剥離片1点(87)が出土した。(第16図)

②炭化物集中地点2 (第18図)

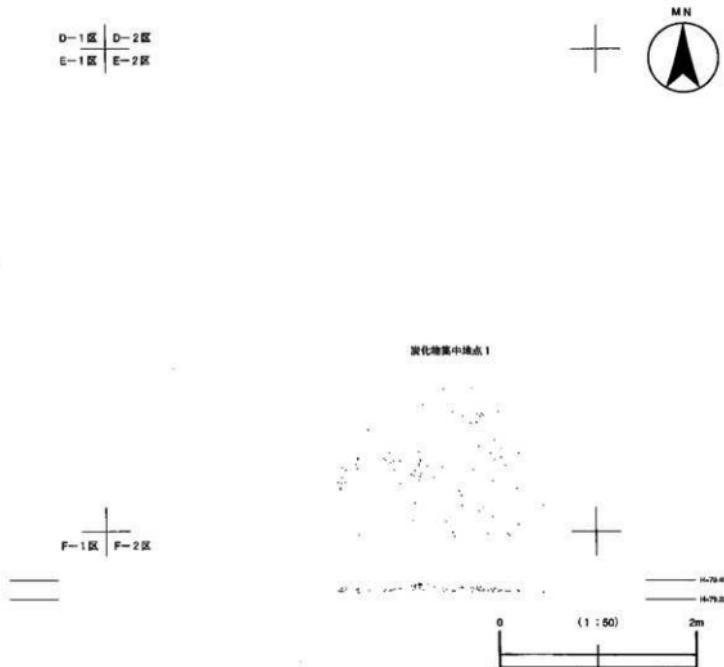
炭化物集中地点2はE-3区に検出された。炭化物の平面分布は約1.1m×0.9mの梢円形の範囲内に密な状態で広がり、水平分布は検出面とほぼ同一レベルに出土した。

③炭化物集中地点3 (第18図)

炭化物集中地点3はD・E-3・4区に検出された。この遺構からは5基検出された炭化物集中地点の中でも最も多くの炭化物が確認され、炭化物の平面分布は約2.5m×1.7mの梢円形の範囲内に満遍なく広がり、水平分布では検出面から18cmの範囲に密に出土した。遺構の北西側が事業対象区域外であり、炭化物の出土分布の状況からその広がりが事業対象区域外に延びている可能性もある。また剥離片7点(86・88~93)が出土した。(第16図)



第18図 浜場遺跡 炭化物集中地点2・3 平面・断面図



第19図 浜場遺跡 炭化物集中地点1 平面・断面図

④炭化物集中地点4（第15図）

炭化物集中地点4はF-3・4区に検出された。炭化物の平面分布は約 $1.4\text{m} \times 0.6\text{m}$ の半円形の範囲内に密な状態で広がり、水平分布は検出面とほぼ同一レベルに出土した。また遺構の南側が事業対象区域外であり、炭化物の出土分布の状況からその広がりが事業対象区域外に延びている可能性が充分に考えられる。また石匙未製品(57)、石核(58)、剥片(83)がそれぞれ1点ずつ、炭化物の出土が認められた範囲内に出土した。（第16図）

⑤炭化物集中地点5（第17図）

炭化物集中地点5はD-9・10区に検出された。炭化物の平面分布は約 $3.6\text{m} \times 1.1\text{m}$ の半楕円形の範囲内に疎な状態で広がり、水平分布は検出面とほぼ同一レベルに出土した。また遺構の南側が事業対象区域外であり、炭化物の出土分布の状況からその広がりが事業対象区域外に延びている可能性が充分に考えられる。

IX-a・b層出土土器

本調査では、縄文時代早期の遺物包含層IX-a層から210点、IX-b層から5点の土器が確認された。これらの遺物を施文等から下記の定義により分類を試みた。

- 第I群 口唇部外端に貝殻刺突による刻目を施し、その下位に斜位の貝殻条痕文を施文するもの。
- 第II群 胸部に縦位又は斜位の貝殻刺突文を施文するもの。
- 第III群 口縁部に斜位の貝殻刺突文を施し、その下位に貝腹復縁による綾杉状に幅広な貝殻条痕文を施文するもの。
- 第IV群 口縁部内面に横位の胴部外面に縦位の浅い山形押型文を施文するもの。
- 第V群 胸部に間隔をおきながら、2cm程度の幅狭な撲糸文帯を縦位に施し、その上に横位の沈線文帯を施文するもの。
- 第VI群 口縁部及び胸部に横位又は斜位の細沈線を施すもの。
- 第VII群 口縁部に貝殻連続刺突文や幾何学状沈線文を施し、胸部には条線を幾何学的に構成するもの。
- 第VIII群 口縁部とその下位に横位の貼付短突帯が巡り、その突帯に貝殻腹縁による刺突文を施し、胸部に貝殻腹縁による小波状の押引文を施文するもの。
- 第IX群 胸部に貝殻腹縁による波状文を施文するもの。
- 第X群 土器と判別できるが、残存部位が小さく形式不明のもの。

①第I群

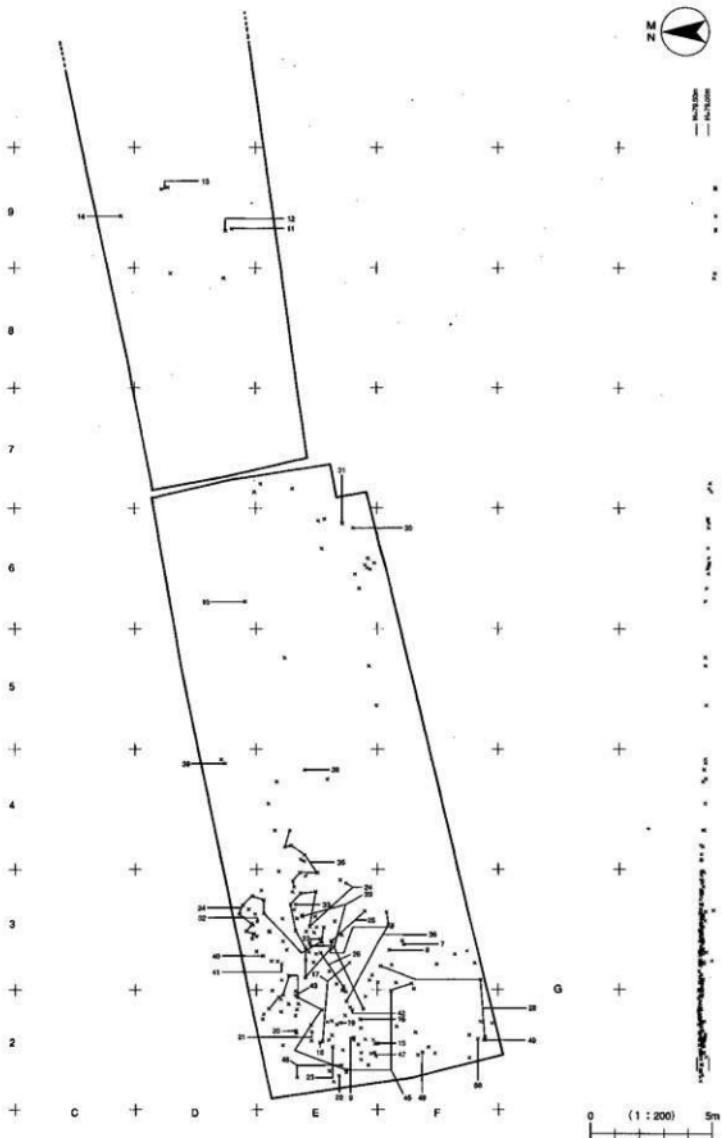
第I群は「口唇部外端に貝殻刺突による刻目を施し、その下位に斜位の貝殻条痕文を施文するもの。」と定義した。型式は縄文時代早期前葉の前半式土器に比定される。第I群に属すると判断した土器片は3点確認された。その全点（7～9）を実測・図化（第21図）した。この群の出土分布は、3区西側のE-2区、F-3区に広がる。分布の傾向は出土量が少ないため判断が困難である。

7・8は深鉢の口縁部である。直行しており、7の口縁部の端部は丸みを帯び、8は外面に口唇部外端に見られる貝殻刺突が1条認められ、口唇部が欠けたと思われ、口縁部端部の形状は不明である。9は深鉢の胴部である。外面に斜位・横位の貝殻条痕文が施文され、上端には輪積みの接合痕が露出している。また7～9の土器片は胎土に含まれる混砂量が多めであるため器面が剥離しやすく、内面調整は粗い。

②第II群

第II群は「胸部に縦位又は斜位の貝殻刺突文を施文するもの。」と定義した。型式は縄文時代早期前葉の加賀山式土器に比定される。第II群に属すると判断した土器片は1点確認された。その1点（10）を実測・図化（第21図）した。この群は1点のみの出土であり、D-6区で出土した。分布の傾向は出土量が少ないため判断が困難である。

10は深鉢の胴部である。器壁は比較的薄く、縦位の貝殻刺突文間に斜位の貝殻刺突文で埋めており、刺突文の間隔は特に疎である。



第20図 浜場遺跡 縄文時代早期土器 遺物出土状況 全体図

③第III群

第III群は「口縁部に斜位の貝殻刺突文を施し、その下位に貝腹復縁による綾杉状に幅広な貝殻条痕文を施文するもの。」と定義した。型式は縄文時代早期中葉の石坂式土器に比定される。第III群に属すると判断した土器片は6点確認された。そのうち接合遺物を含む4点(11~14)を実測・図化(第21図)した。この群の出土分布は1区西側のC・D-9区に出土し、調査区のほぼ中央に広がる。分布の傾向は、この土器群は他の土器群とは出土分布が異なり、縄文早期土器の遺物分布の東端に出土し、分布域も大別され、台地の東斜面に出土分布が見込まれる。

11~14は深鉢の胴部である。11は胴部の上位に斜位の貝殻連続刺突文と、その下位に区切りを示すような1条の横位の貝殻刺突文が見られることから、口縁部に近い部位であると思われる。12・13は斜位の幅広な貝殻条痕文が施文され、14は胴部上位に斜位と横位の貝殻条痕文が見られることから底部に近い部位と思われる。また、12・14は内面調整が丁寧にナデているが、その他は混砂量が多含なためか剥離が認められる。

④第IV群

第IV群は「口縁部内面に横位の胴部外面に縦位の浅い山形押型文を施文するもの。」と定義した。型式は縄文時代早期中葉の手向山式土器に比定される。第IV群に属すると判断した土器片は20点確認された。そのうち接合遺物を含む9点(15~21)を実測・図化(第21図)した。この群の出土分布は3区西側のE-2・3区に広がり、主にE-2区に多く出土が見られた。分布の傾向は調査区の西端に集中し、E-2区からは炭化物集中地点1が確認されており、その検出域と第IV群はほぼ同レベルでの遺物分布であり、さらに、第IV群の出土分布はこの炭化物集中地点1の東側に広がる出土分布であり、炭化物集中地点1と第IV群の関連性が考えられる。

15・16は深鉢の口縁部である。大きく外反し、端部は丸くおさまる。口縁部内面に横位の浅い山形押型文が施文される。15の外面上には工具による横位の細沈線文が刻まれ、細沈線の上下を結んで幾何学上に施文する。17~23は深鉢の胴部である。17~21は外反するように開き、浅い山形押型文を施文する。22・23は胴部中位のが「く」字状に屈曲する部位である。15~21の胎土に含まれる鉱物が微細で、胎土のキメが細かい。

⑤第V群

第V群は「胴部に間隔をおきながら、2cm程度の幅狭な撚糸文帯を縦位に施し、その上に横位の沈線文帯を施文するもの。」と定義した。型式は縄文時代早期後葉の塞ノ神A-a式に比定される。第V群に属すると判断した土器片は47点確認された。そのうち接合遺物を含む6点(24~29)を実測・図化(第21・22図)した。この群の出土分布は、3区のほぼ全域のE・F-2~4区に広がり、主にE-3区に多く出土が見られた。分布の傾向は調査区の西端に集中し、またE-4区の西側には遺物分布は確認できず、E-4区の南西側に広がっているように推測される。また、E-4区からは第V群の分布とほぼ同レベルで集石1が確認されており、第V群の出土分布はこの集石1の南側に広がっていることから、集石1と第V群の関連性が考えられる。

24~28は深鉢の胴部である。24は緩やかに内湾し、胴部上位に5条の沈線文帯が巡り、

その沈線は2条単位で上下が弧状に繋がる。25・27・28は横位の沈線文帯が施文されている。28は下位が肥厚し、底部に近いと思われる。26は1条の横位の沈線文と幅狭な縦位の撚糸文帯が施文される。29は深鉢の底部である。外面に4条の縦位の撚糸文帯が施文される。

⑥第VI群

第VI群は「口縁部及び胴部に横位又は斜位の細沈線を施すもの。」と定義した。型式は塞ノ神A式の施文様式を踏襲しているように思われ、寒ノ神A式の範疇の括りで分類した。第VI群に属すると判断した土器片は4点確認された。そのうち2点(30・31)を実測・図化(第22図)した。この群の出土分布は、3区東側のE-6区にのみ認められる。分布の傾向は出土量が少ないため判断が困難である。

30は深鉢の口縁部である。大きく開いて直行し、外面に横位又は斜位の細沈線文が4条確認でき、その施文に規則性は感じられない。内面・外面の調整は粗く器面は歪で、著しく煤が付着する。31は深鉢の胴部である。外面に横位の細沈線文が3条確認でき、途中で細沈線が終了している。30同様内面・外面の調整は粗く器面は歪で、著しく煤が付着する。

⑦第VII群

第VII群は「口縁部に貝殻連続刺突文や幾何学状沈線文を施し、胴部には条線を幾何学的に構成するもの。」と定義した。型式は繩文時代早期後葉の塞ノ神Bd式に比定される。第VII群に属すると判断した土器片は48点確認された。そのうち接合遺物を含む8点(32~39)を実測・図化(第22図)した。この群の出土分布は、3区のほぼ中央のD-3・4区、E-2~5区、F-2・3区に広がり、主にD・E-3・4区に多く出上が見られた。分布の傾向は調査区の西端に集中し、D-3・4区からは炭化物集中地点3が確認されており、その検出域と第VII群はほぼ同レベルでの遺物分布であり、さらに、第VII群の出土分布はこの炭化物集中地点3の周りを巡るような出土分布であり、炭化物集中地点3と第VII群の関連性が考えられる。

32・33は深鉢のII縁部である。32は、口縁部に縦位の貝殻腹縁による貝殻連続刺突文が横位に廻り、その下位に斜位の条線が施文される。33は32同様に口縁部に縦位の貝殻腹縁による貝殻連続刺突文が横位に廻る。34~39は深鉢の胴部である。34は胴部が緩やかに内湾し、頸部から口縁部に向かってラッパ状に開く。外面に縦位の貝殻腹縁による貝殻連続刺突文とその下位に格子状の貝殻条痕文が施され、さらにその下位に縦位の貝殻腹縁による貝殻連続刺突文が横位に等間隔に3条廻り、その下位に格子状の貝殻条痕文が施文される。35は下位に貝殻腹縁による貝殻条痕文が深く横位に施文される。36は下位に斜位の貝殻腹縁による貝殻条痕文が施文される。37は横位の沈線文とその下位に縦位の貝殻腹縁による貝殻連続刺突文が横位に施文される。38は縦位の貝殻腹縁による貝殻連続刺突文が横位に施され、その下位に幾何学状の沈線文が施文される。39は底部に近いと思われ、外面に幾何学状の条痕文を施した後ナデ磨いているように思われる。

⑧第VII群

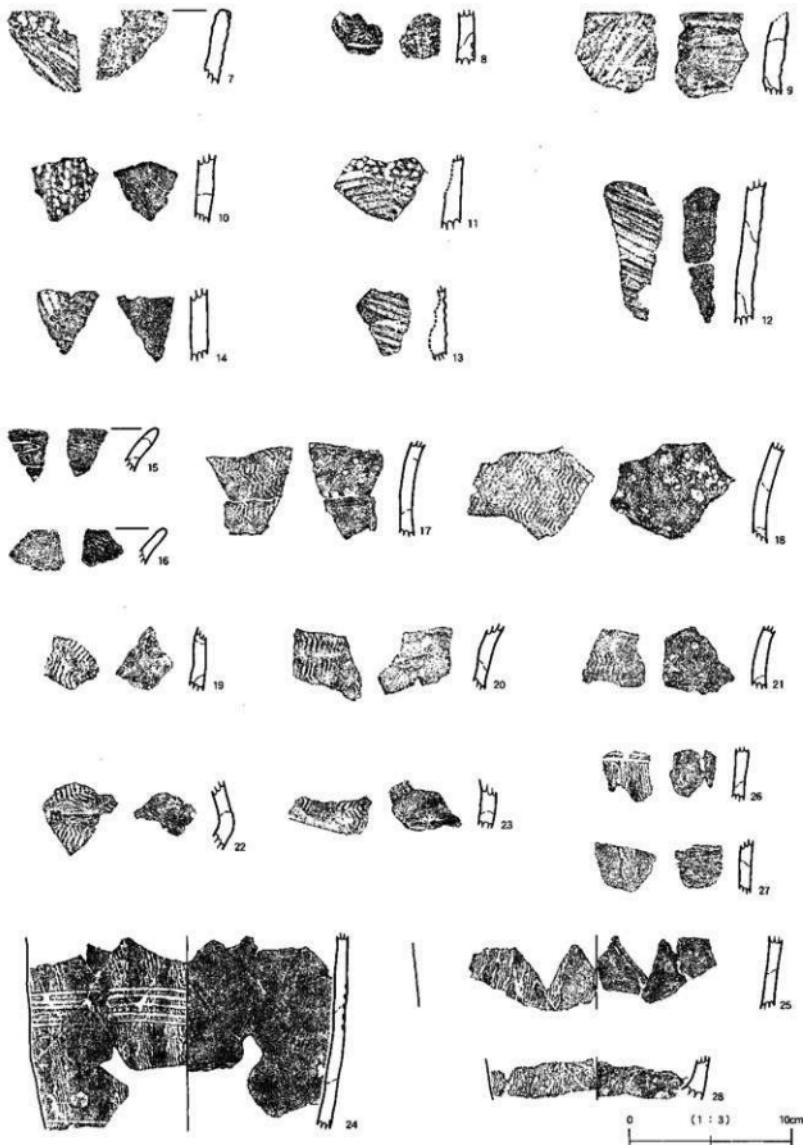
第VII群は「口縁部とその下位に横位の貼付短突帯が廻り、その突帯に貝殻腹縁による刺突文を施し、胸部に貝殻腹縁による小波状の押引文を施文するもの。」と定義した。型式は縄文時代早期後葉の苦浜式土器に比定される。第VII群に属すると判断した上器片は56点確認された。そのうち接合遺物を含む9点(40~48)を実測・図化(第23図)した。この群の出土分布は、3区のほぼ中央のE-2・3区、F-2・3区に広がり、主にE-3区に多く出土が見られた。分布の傾向は調査区の西端に集中し、E-3区からは炭化物集中地点2が確認されており、その検出域と第VII群はほぼ同レベルでの遺物分布であり、さらに、第VII群の出土分布はこの炭化物集中地点2の西側に広がる出土分布であり、炭化物集中地点2と第VII群の関連性が考えられる。

この土器群は混砂量が多く、器面が剥離しやすいことも特徴である。また内面の調整は粗く器壁が歪である。40~43は深鉢の口縁部である。いずれも小片であるため、断定はできないが口縁部は直行するものと思われる。40~42は口縁部・口唇部に横位の貼付短突帯を巡らす。40は口唇部に貝殻腹縁による縦位の刺突が刻まれ、その下位に貼り付けた短突帯にも貝殻腹縁による縦位の刺突が刻まれる。41・42は口唇部が見られない。41は貼り付けた短突帯の下位に、貝殻腹縁による小波状と思われる押引文が施文される。42は貼り付けた短突帯に貝殻腹縁による縦位の刺突が刻まれ、その下位に斜位の条痕文が施文される。43は貼付短突帯を持たない。口唇部がやや肥厚気味で、その下位に斜位の条痕文が施文される。44~48は深鉢の胸部である。44は貝殻腹縁による小波状の押引文が3条を単位にして深く施文される。器壁は厚い。45は横位の貼付短突帯が廻り、突帯には貝殻腹縁による縦位の刺突が刻まれる。その下位は貝殻腹縁による器面調整をした後ナデ磨きを施している。また器形は器面に凹凸が見られるものの、頸部から口縁部に向かって緩やかに開き、頸部に締まりも見られないことから円筒形状を呈すると思われる。44と同様器壁は厚い。46は上位に貼付短突帯の断片が見られ、その下位に斜位の貝殻腹縁による押引文が施文される。47は貝殻腹縁による小波状の押引文が深く施文される。また焼成前に穿ったと見られる孔が施文の上位に見られる。48は貝殻腹縁による横位の押引文が深く施文される。また47と同様に焼成前に穿ったと見られる孔が施文の上位に見られる。

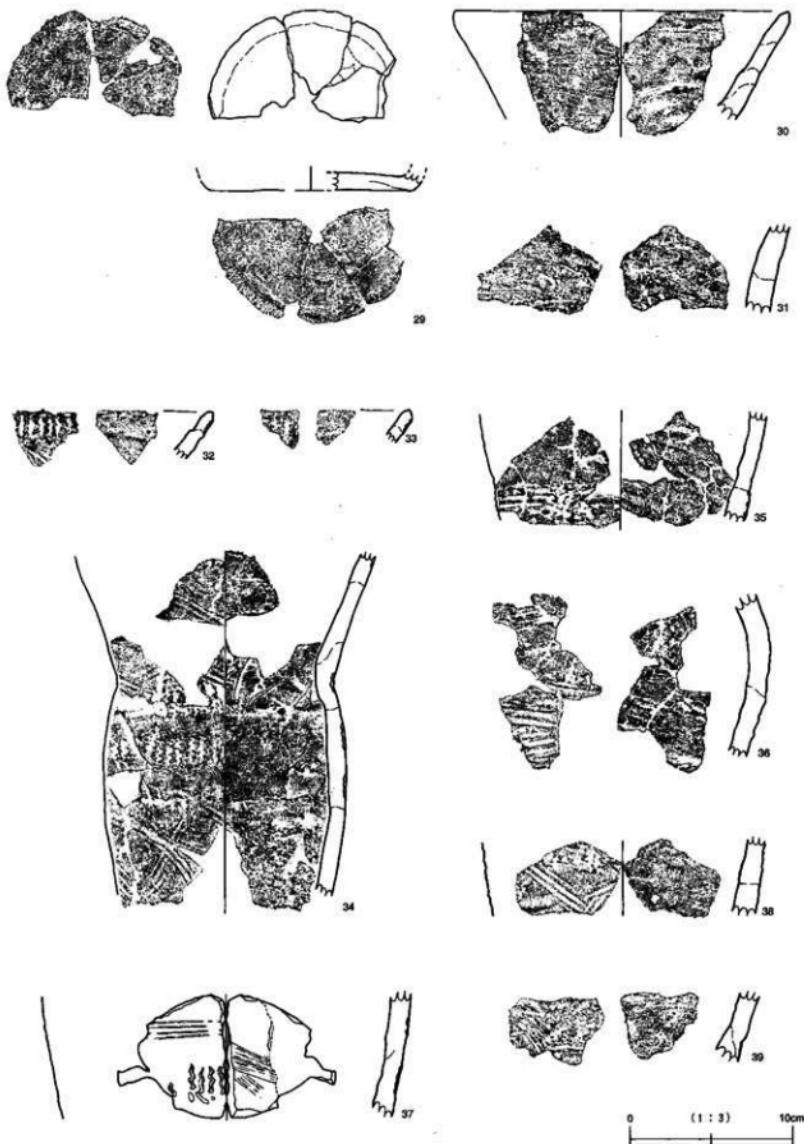
⑨第IX群

第IX群は「胸部に貝殻腹縁による波状文を施文するもの。」と定義した。型式は第VII群と同様に縄文時代早期後葉の苦浜式土器に比定される。第IX群に属すると判断した上器片は4点確認された。そのうち接合遺物を含む2点(49・50)を実測・図化(第23図)した。この群の出土分布は、3区の西端のF-2区のみに認められる。分布の傾向は出土量が少ないため判断が困難である。

49・50は深鉢の胸部である。2条から3条を単位とした横位の貝殻腹縁による波状文を施文し、内面には工具によるケズリが斜位或いは横位に調整がなされている。また器形は頸部から口縁部に向かって開き、頸部に締まりも見られないことから円筒形状を呈すると思われる。50には縦位と横位に1条ずつ貼り付けた短突帯が見られ、その突帯には貝殻刺突が深く刻まれる。



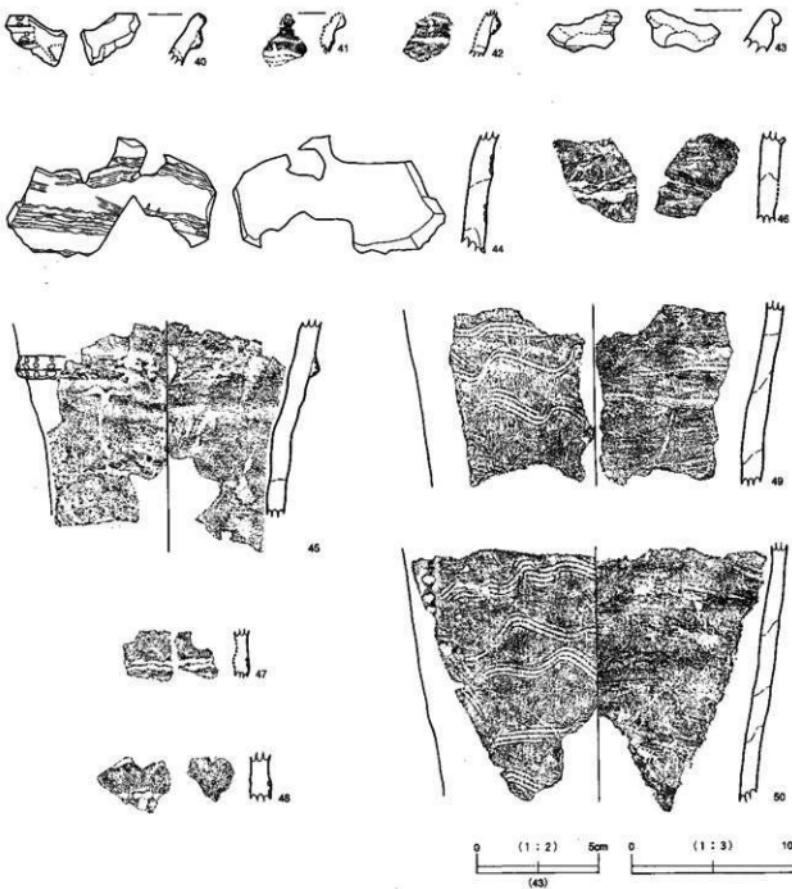
第21図 浜塙遺跡 繩文時代早期土器 1



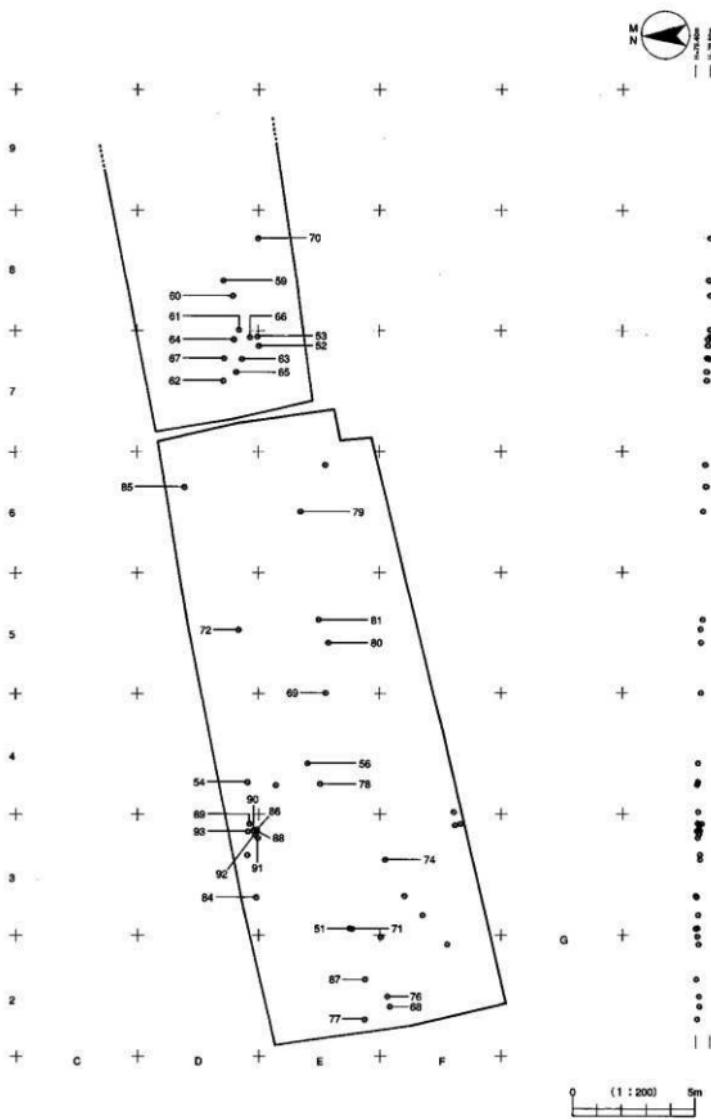
第22図 浜場遺跡 繩文時代早期土器 2

⑩第X群

第X群に属すると判断した土器片は27点確認された。第X群は土器と判別できるが、残存部位が小さく型式不明のものであるため、実測・図化をせず、文章の表現のみに留める。この群の出土分布は3区のほぼ全域に広がり、D-4区、E-2~7区、F-2・3区に認められる。個々の出土区等は第16表のとおりである。



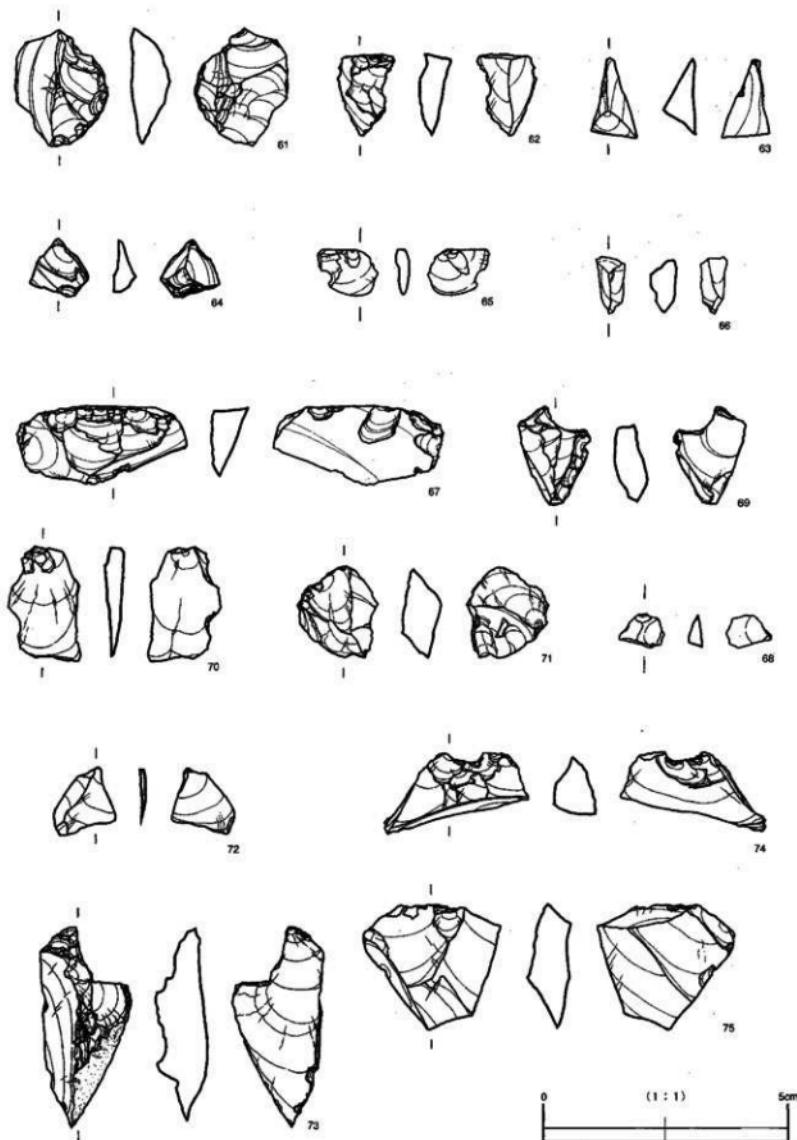
第23図 浜場遺跡 桿文時代早期土器 3



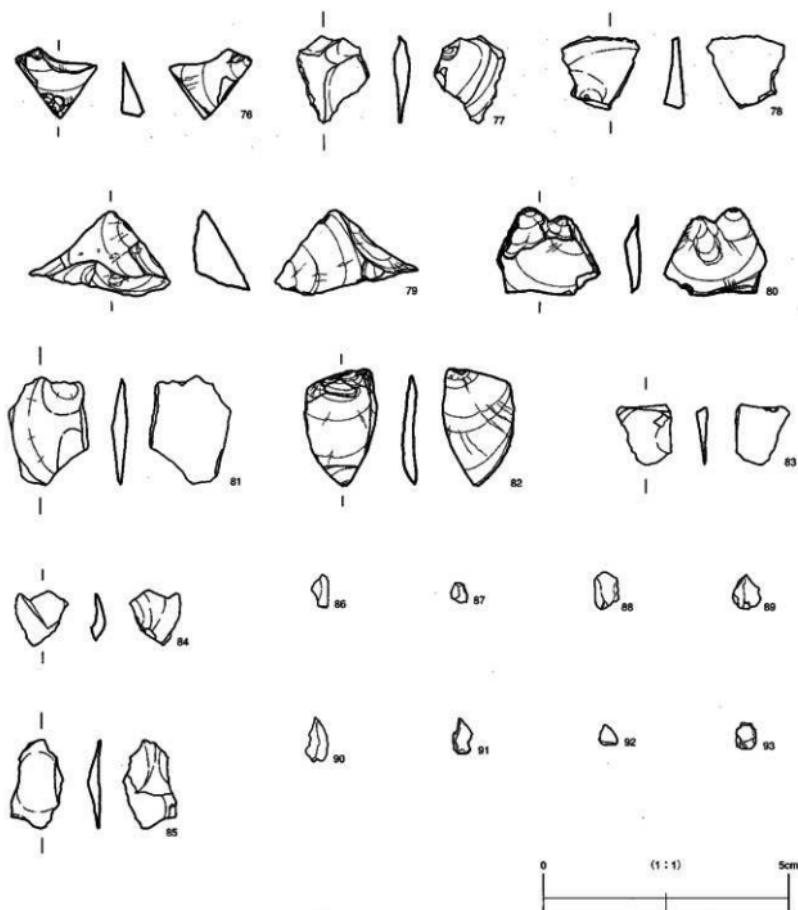
第24図 浜場遺跡 IX-a層出土 石器出土状況 全体図



第25図 浜場遺跡 IX-a 層出土 石器 1



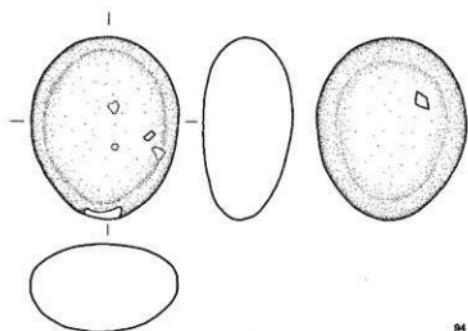
第26図 浜場遺跡 IX-a層出土 石器 2



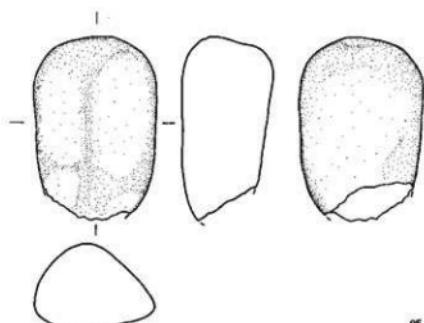
第27図 浜場遺跡 IX-a層出土 石器 3

IX-a層出土石器

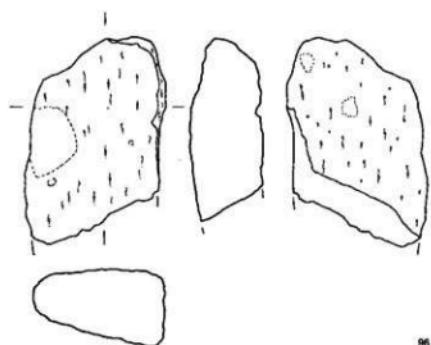
IX-a層より石器と認められる遺物は47点出土した。うち45点(51~96)を実測・図化(第25~28図)した。石礫6点、石匙未成品1点、石核1点、剥片27点、剥離片8点、磨石2点、軽石製品1点の組成である。剥離片についてはかなりの小片であるが、炭化物が集中して出土した地点の範囲内より出土し、(第16図)その関連性を無視出来ないことから遺物として整理し、実測・図化(第27図)を試みた。



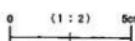
94



95



96



第28図 浜場遺跡 IX-a層出土 石器 4

石器の分布は、複数点の出土が認められた遺物の分布を見ると、石鎌がD-4・7区、E-3・7区、F-2区でそれぞれ出土している。剥片はD-3・5~8区、E-2~6区、F-2・3区で出土し、D-7・8区、F-3区に多く分布する。剥離片がD-2・3区、E-2区で出土し、D-3・4区で検出された炭化物の集中出土地点3に多く分布する。磨石はF-2・3区で出土している。いずれの石器の分布は縄文時代早期調査区の西側に確認され、調査区東側のC~E-9・10区には全く石器は確認することは出来なかつた。

なお、石質に着目した場合、分布の特徴として姫島産と思われる黒曜石に分類される石器は、D・E-4・5・7・8区、F-2・4区に出土している。とりわけD・E-7区の約3mの範囲内に石鎌2点、剥片7点の集中した分布が確認されている。また黑色安山岩に分類される石器は、D-3区、F-2・3区、E-2・4~6区に出土している。前述の姫島産と思われる黒曜石と同様な集中した分布は確認されなかつたが、調査区の南西側に遺物の分布が見られる。

51~56は石鎌である。51はチャート製である。完形で抉入部が深い抉りをもつ薄手の石鎌である。52~54は姫島系の黒曜石製である。52は長身で先端角も狭く、抉入部が深い抉りをもつ薄手の石鎌である。右肩が欠損

している。53は抉入部が深い抉りをもつ比較的小型の石鎌である。左肩が欠損している。54は抉入部が比較的浅い抉りをもつ薄手の石鎌である。右肩が欠損している。55は頁岩製であり、抉入部が比較的浅い抉りをもつ薄手の石鎌である。両肩が欠損している。56は石鎌の未成品と思われ、抉入部が深い抉りをもつ薄手の石鎌である。先端部は丸くおさまり、右肩が欠損している。57は石匙の未成品と思われる。自然面が見られ刃部は3箇所と思われるが、刃部に微細な剥離は見られるものの加工が少なく、茎部は折損している。58は石核である。自然面が見られ、剥離面も少ない。59～85は剥片である。59～69は姫島系の黒曜石製、70～72はチャート製と思われる。73～83は黒色安山岩製、84・85は安山岩製である。59・61～64・66・67・69～71・73～83・85はフレーク状の剥片であり、60・65・68・72・84はチップ状の剥片で、剥離面数も比較的少ない。86～93は剥離片である。86・87は黒色安山岩製、88・89は安山岩製と思われ、90～93は石質が不明である。いずれも長さが1cmに満たない、最大厚が1mm程度の薄い剥片である。94・95は砂岩製の磨石である。94は表面に研磨による磨耗面があり、底面は平坦に近い。95は底面が平坦で、研磨による磨耗面が全ての面にある。96は軽石製の軽石製品である。岩質がもなく表面に剥落が多いため、使用の用途等不明であるが、器形の成形など人為的に加工を加えていることから、石器として判断した。

2 古墳時代の調査

(1) VII層上面検出遺構の調査

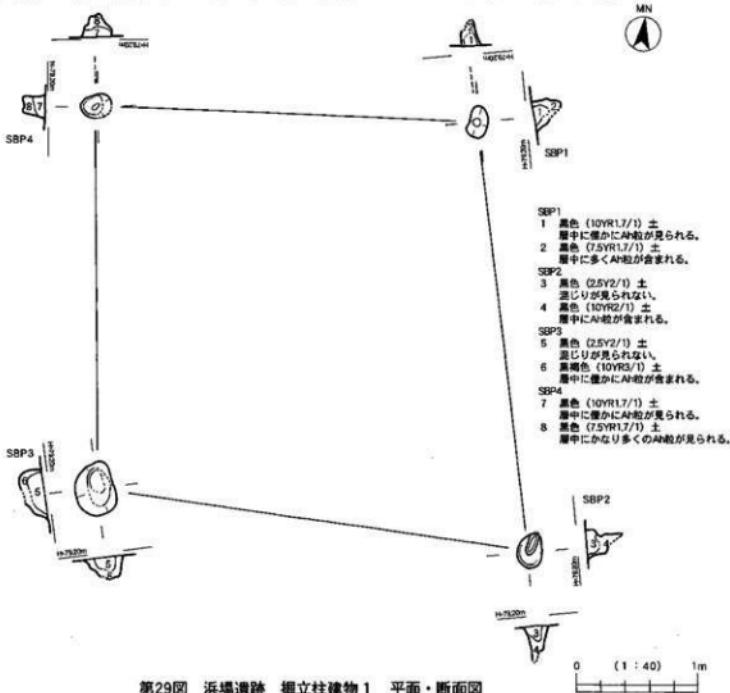
VII層上面の遺構検出は調査区全域で行った。検出された柱穴は全て半裁を行い、半裁面の観察により判断を行った。そのため半裁段階で柱穴番号の欠番が生じている。また、調査の進捗の関係から大調査区の1・2・3区ごとで柱穴番号を設定したため、第18~20表に見られるように柱穴番号の表記が重なることをご容赦願いたい。

調査の結果、掘立柱建物がC-13・14区で1基、柱穴がB-14~16・18・19区、C-10~12・15~19区、D-5・10~15区、E-4~6・8・9区で42基確認された。

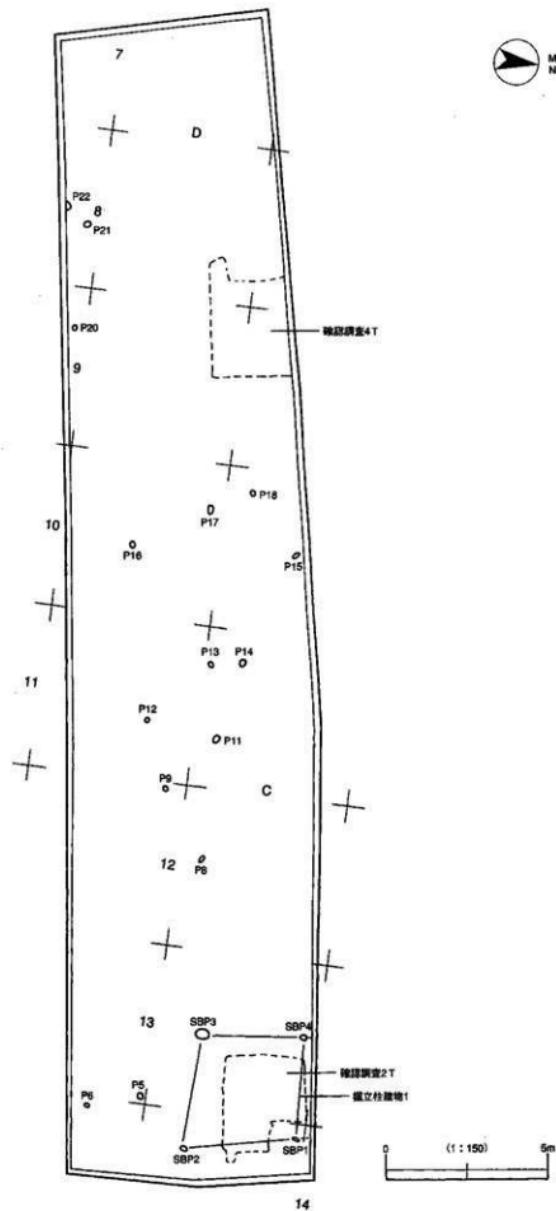
ア 挖立柱建物

①掘立柱建物1 (第29図)

掘立柱建物1はC-13・14区で検出された。長軸方向はN13.5°Wの北北西方向に延び、遺構の平面形は桁行1間×梁行1間の若干歪みのある長方形を呈する。検出された柱穴と柱穴の間隔が桁・梁とも3mを越えることから、遺構の規模がまだ大きいことが考えられ、遺構の範囲の一部が調査区外に延びている可能性が考えられる。検出された柱穴のうちSBP1・2・4は、ほぼ同規模の柱穴であるのに対し、SBP3は平面形の規模が大きく、掘り込みの深さはSBP1・2・4とほぼ同一であることから、柱の建替え等を行った際に従来あった柱穴を広げて掘削したことによるものと思われる。



第29図 浜場遺跡 掘立柱建物1 平面・断面図



第30図 浜場遺跡 1区 置層上面 造構検出状況図

第21表 浜場遺跡

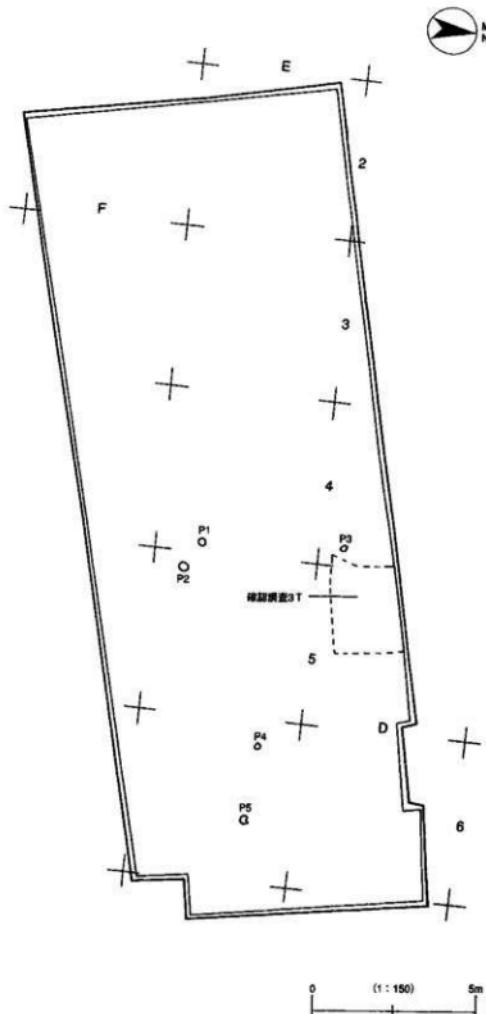
掘立柱建物1 計測表

(単位:cm)

検査番号	第29回	検出区	C-13・14区	
検出層	Ⅳ層上面	方位	N13.5°W	
床面積 (m ²)			11.08725	
梁行1間	梁間柱間	梁行間		
P1-P4	314.0	314.0		
P2-P3	358.0	358.0		
平均	336.0	336.0		
梁桁1間	梁桁柱間	梁桁間		
P1-P2	357.0	357.0		
P3-P4	315.0	315.0		
平均	336.0	336.0		
柱穴番号	深さ	長径	短径	柱穴平面形
SBP1	23.0	26.0	17.5	楕円形
SBP2	29.5	27.0	20.0	楕円形
SBP3	19.0	42.5	31.0	楕円形
SBP4	19.0	25.0	19.0	楕円形
平均	22.625	30.125	21.875	

イ 柱穴

柱穴はB-14~16・18・19区、C-10~12・15~19区、D-5・10~15区、E-4~6・8・9区で検出された。柱穴毎の計測値については、大調査区毎に第18~20表に述べる。検出された柱穴は、形状は円形若しくは楕円形であり、長径の平均値は24.4 cm、深さの平均値は34.6 cmを測る。柱穴の検出分布は調査区東側に主に広がり、西側に向かうに従い、遺構密度が疎になる傾向がある。また、柱列などの規則性を持った並びや掘立柱建物1の軸方向について遺構配置を検討したが上屋等は確認出来なかった。



第32図 浜場遺跡 3区 Ⅳ層上面 遺構検出状況図

(2) IV層上面検出遺構の調査

IV層上面の遺構検出は調査区全域で行ったが、3区においてはⅢ層～Ⅶ層までが削平を受けていたため、実際の検出は1・2区のみであった。

調査の結果、IV層上面においてC-10区、D-9～13区、E-9・10区に溝1基、B・C-14区、B-18区、B-20区に土坑3基が検出された。

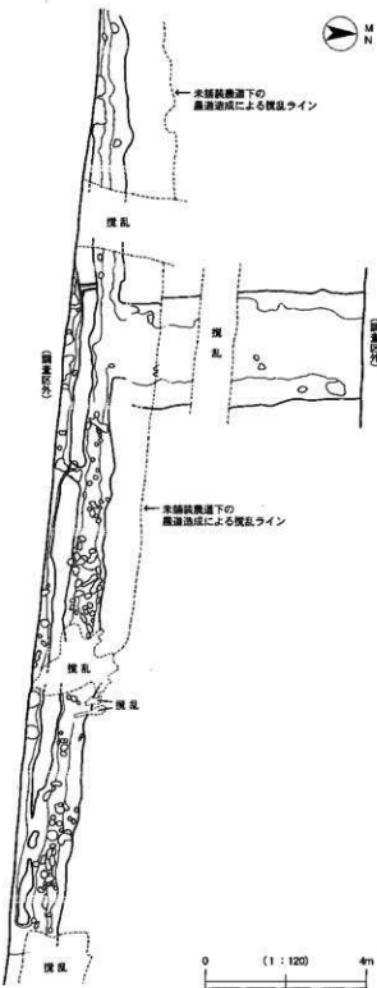
ア 溝

①溝1（第33図）

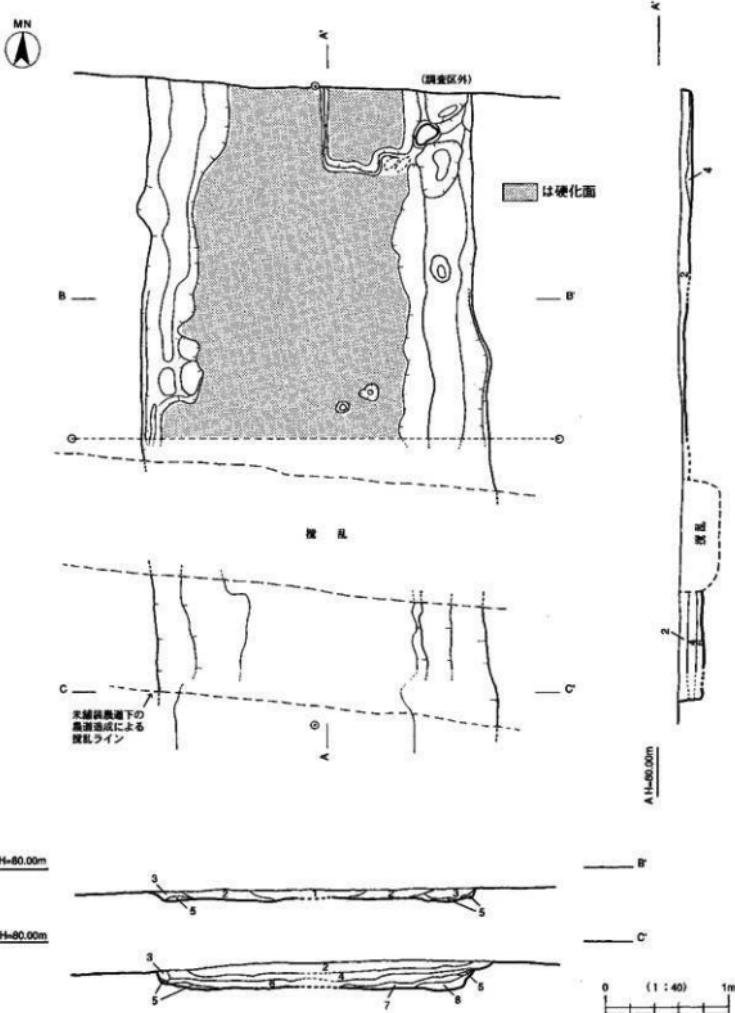
溝1はC-10区、D-9～13区、E-9・10区の広範囲で検出された。この遺構は南北方向に延びる幅の広い溝状遺構（第34図）と、その遺構に直交するよう東西方向に延びる2条の幅の細い溝状遺構（第36～39図）が確認された。幅の広い溝状遺構の長軸は5.04mを測り、幅の細い溝状遺構の長軸は23.60mを測る。

幅の広い溝状遺構の横幅はほぼ均一で約2.8mを測る。遺構の底と思われる部分で層の硬化が確認され、その面を追って検出を試みたところ、第34図で示してあるA-A'断面のような結果となった。遺構の中央と南端は搅乱を受けているため全体の様相は判断し難いが、遺構中央の搅乱部分から南北で段差が生じていた。また、遺構中央の搅乱部分から北側はやや強い硬化面をもち、南側は硬化面をほとんど確認する事は出来なかった。

幅の狭い溝状遺構の横幅は、幅の広い所で約0.98m、幅の狭い所で約0.47mを測る。2本の細い溝状遺構はほぼ並列しているが、所々で繋がっている。当初この遺構の直上が未

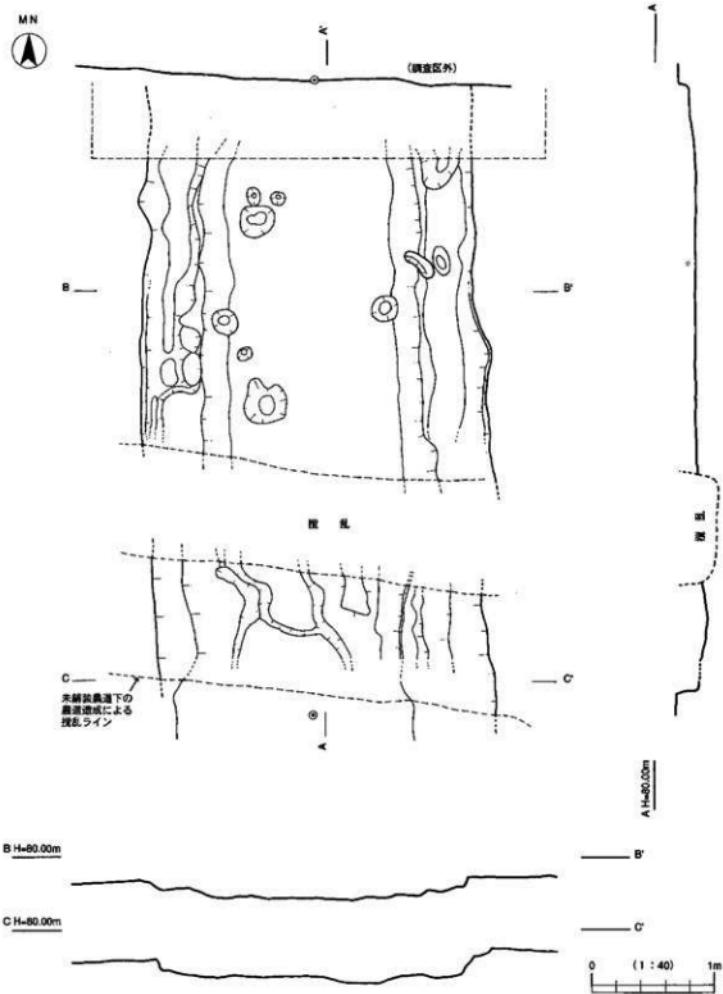


第33図 浜場遺跡 溝1 全体図

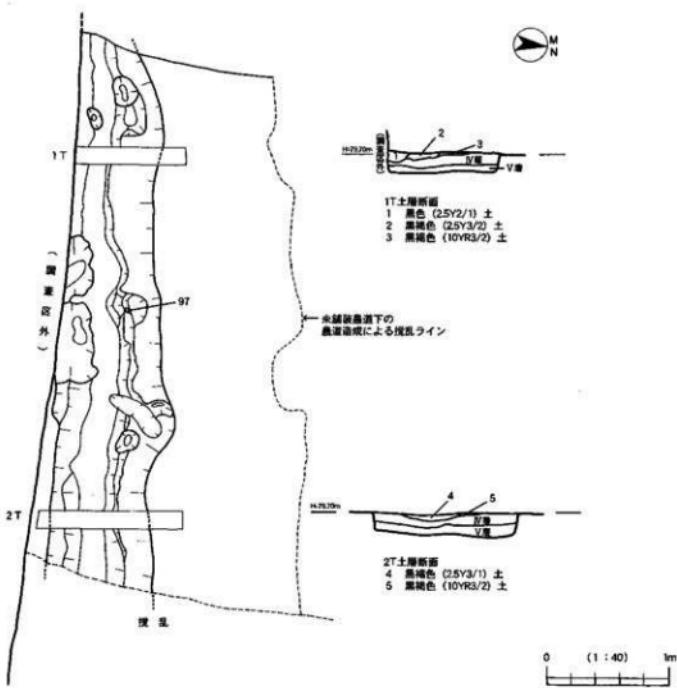


- 1 黒色 (5Y2/1) 土
 - 2 黒褐色 (25Y3/2) 土
 - 3 黒褐色 (25Y3/1) 土
 - 4 黑褐色 (25Y3/2) 土
 - 5 雪灰黄色 (25Y4/2) 土
 - 6 雪灰黄色 (N8/0) 土
 - 7 灰色 (N4/0) 土
 - 8 黑褐色 (25Y3/2) 土
- 層の様子は互層に似る。層中にテフラ等は見られない。締まった層。
層中に僅かに灰白軽石 (25Y8/2 粒径2mm大) を含む。若干粘性を感じられる。よく締まった層。
混じりのない黒色土。
- 層中に僅かに灰白軽石 (25Y8/2 粒径2mm大) を含む。サラサラと締まった層。(層の硬さで3・4を分けられる)
- 層中に僅かに白色バミス (N8/0 粒径1mm大) を含む。
層の様子は6層に似るが、若干締まっている。
- 底層

第34図 浜坂遺跡 溝1 平面・断面図 1



第35図 浜場遺跡 溝1 平面・断面図 2 (硬化面除去後)

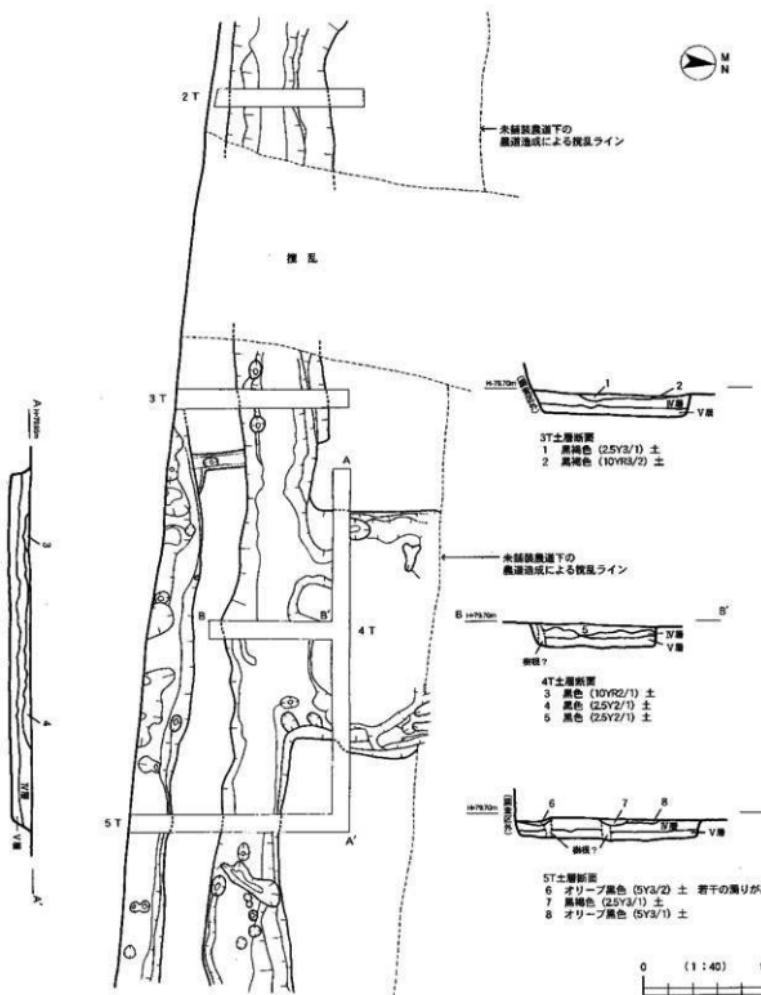


第36図 浜場遺跡 清1 平面・断面図 3 (1・2T部分)

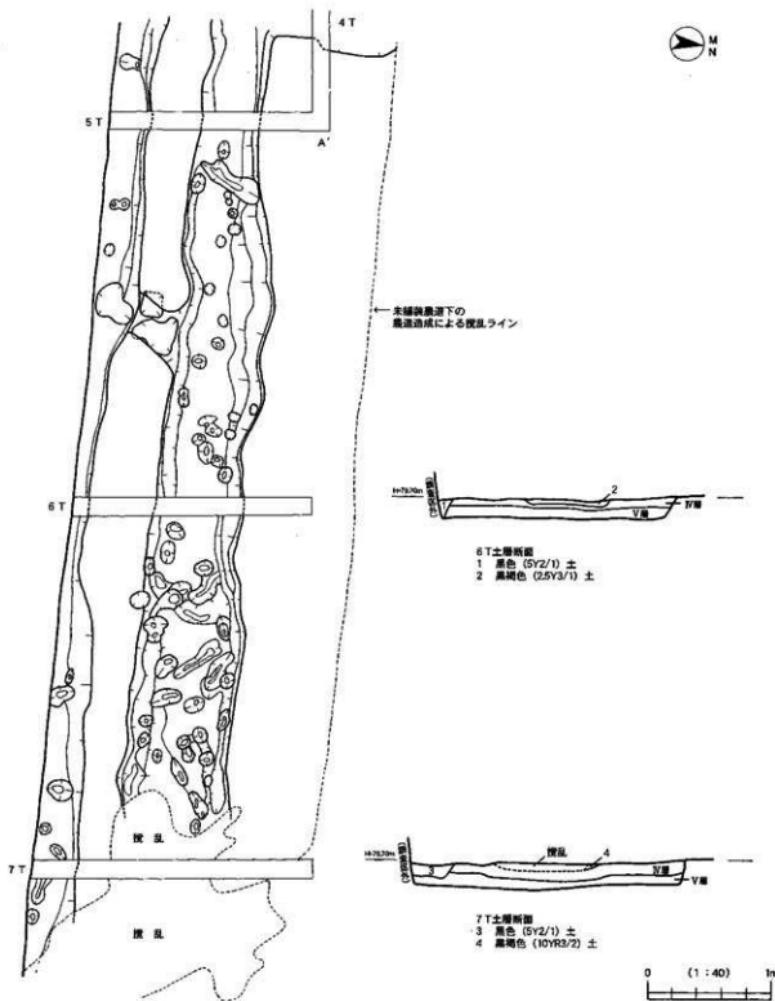
舗装農道部分であり、その農道造成による攪乱を受けており、この攪乱層を除去したところ、その直下から検出することが出来た。そのため造構深度がかなり浅い状態での検出となり、幅の広い溝状造構と幅の狭い溝状造構がほぼ直交するよう繋がることがわかつた。

これを受けて、前述した幅の広い溝状造構中央の攪乱部分から南北で段差が生じていたことに着目し、その北側の硬化面を慎重に除去したところ、その直下からさらにやや緩い層の硬化を確認する事が出来た。また幅の狭い溝状造構の掘り下げを行ったところ、造構の底には硬化は見られなかったが、造構の底面に直径 10~15 cm 程度の円形若しくは梢円形の柱穴状造構が多數確認された。いずれの柱穴状造構も深い掘り込みであり、硬化も確認されなかつた。

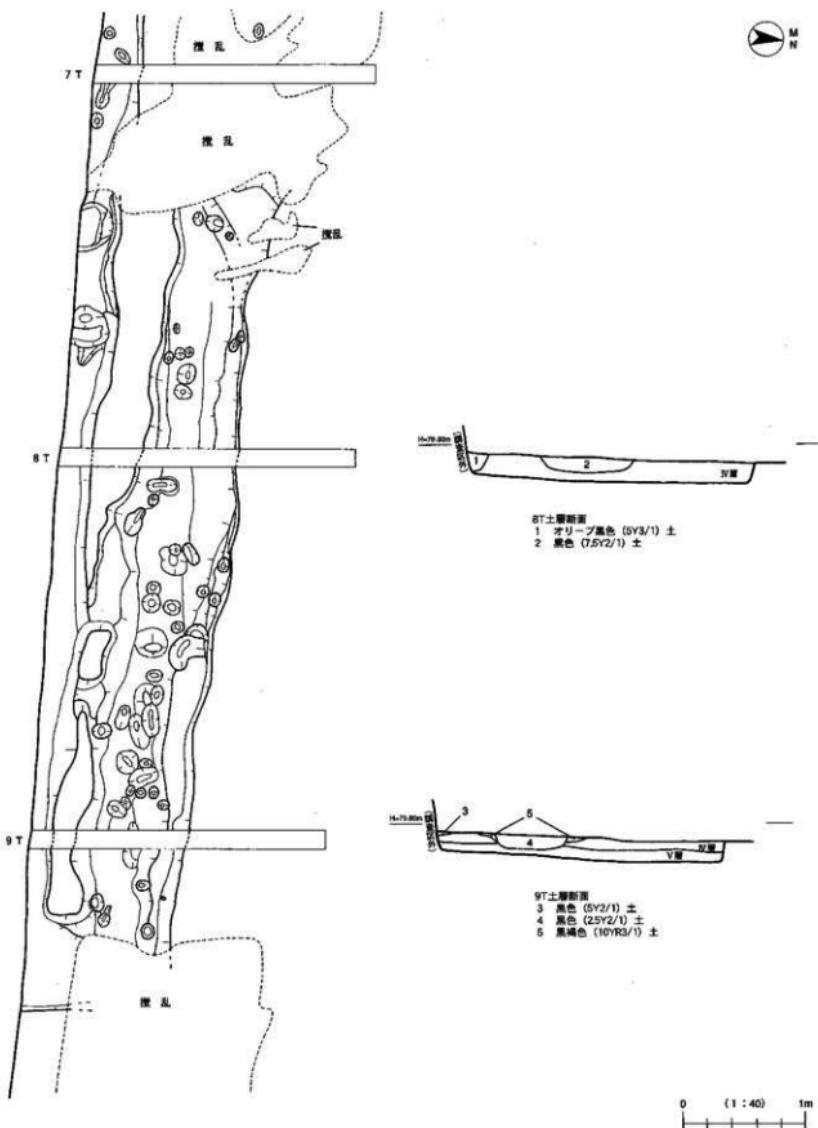
また遺物の出土状況は、幅の広い溝状造構の検出レベルで 4 点の成川式土器と思われる小片と、細い溝状造構からは床着遺物として 2 点の成川式土器が出土した。(第 40 図)



第37図 浜場遺跡 溝1 平面・断面図 4 (2・3・4・5T部分)



第38図 浜場遺跡 溝1 平面・断面図 5 (5・6・7T部分)



第39図 浜場遺跡 溝1 平面・断面図 6 (7・8・9T部分)

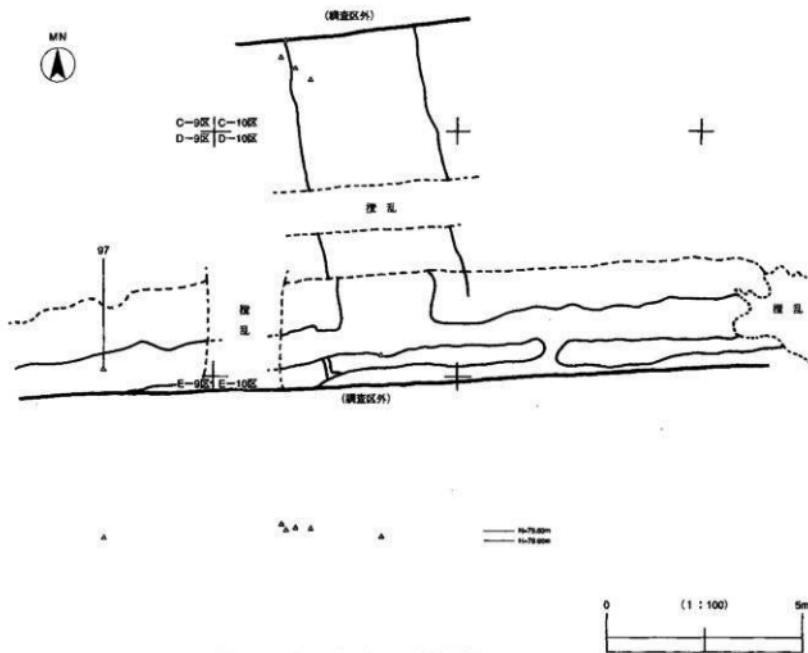
溝1出土遺物

溝1内の床着遺物の中で、比較的破片の大きい1点(97)を実測・図化(第46図)した。溝1内の床着遺物の出土分布はD-9・18区と疎らである。

97は成川式土器の甕の胴部と思われ、わずかに内湾する。外面を塗布したように炭が著しく付着する。

第22表 浜場遺跡 溝1出土 土器観察表

探査番号	番号	注記番号	出土位置 (面・層)	器種	部位	分類	粘土						色 調	施文・側壁 上部:外壁 下部:内壁	出量(cm)	備考	
							石	骨	瓦	鐵	木	砂					
第46図	97	133	D-9区 面1層1	甕	胴部	成川式土器	○				○	○	上部灰褐色 下部黄褐色	(鉢)ハケ目 L-100/2にぶい黄色	-	4.5	表面に著しく灰 白色付着 付着入浴



第40図 浜場遺跡 溝1 遺物出土状況図

イ 土坑

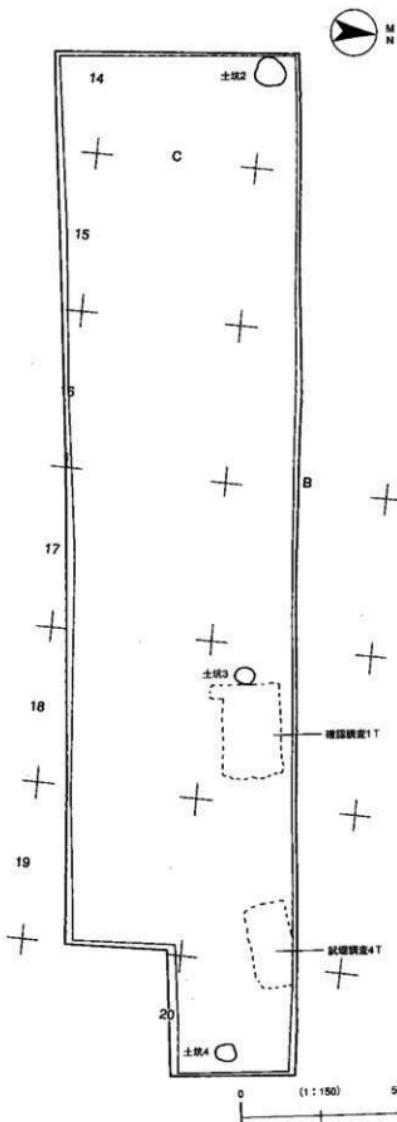
土坑はB・C-14区、B-18区、B-20区で3基検出され、調査区の東側にのみ確認されている。土坑の規模に差異はあるが、比較的土坑の深さも浅い。また全ての土坑から微細な炭化物が確認された。

①土坑2（第42図）

土坑2はB・C-14区で検出された。全体形は楕円形を呈す。造構はV層中まで掘り込まれ、検出面から床面までの最深部で0.20mを測る。埋土中からは微細な炭化物が多数出土し、特に検出面近くの土坑中央に多くの分布が確認された。掘り込みの層中に軽い硬化が認められる部分があり、その硬化層を除去して掘り下げたところ、その下層からも炭化物が少量確認された。土坑の切り合いの可能性や、複数時期の使用等が考えられ、時期等の確認のため、自然科学分析を行った。その結果は第VI章に付す。

②土坑3（第43図）

土坑3はB-18区で検出された。全体形は楕円形を呈す。造構はV層中まで掘り込まれ、検出面から床面までの最深部で0.23mを測る。検出面において、土坑中央に土色の変化が見られた（図版4）が断面上では分層できる程の層の変化ではなかった。土坑2同様埋土中からは微細な炭化物が多数出土し、特に検出面近くの土坑中央に多くの分



第41図 浜場遺跡 土坑2・3・4 造構配置図

布が確認され、土坑の底面近くまで炭化物が出土した。炭化物の出土量は3基検出された土坑の中でも最も多い。またこの土坑内の炭化物も土坑2と同様に自然科学分析を行った。その結果は第VI章に付す。

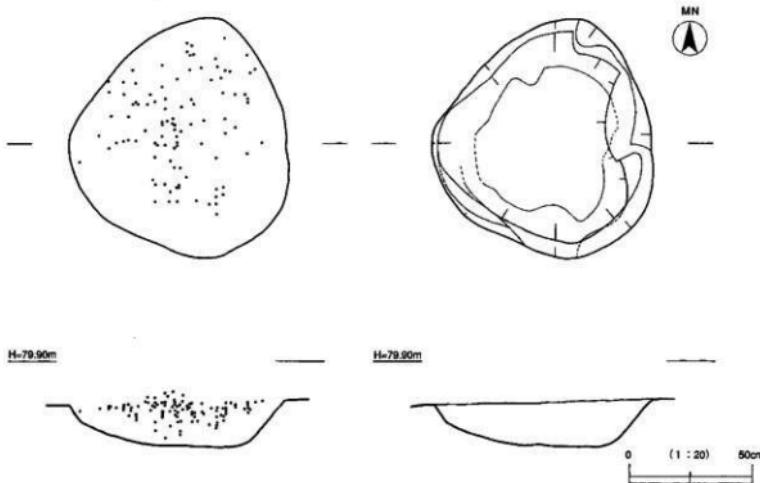
③土坑4（第43図）

土坑4はB-20区で検出された。全体形は橢円形を呈す。遺構はV層中まで掘り込まれ、検出面から床面までの最深部で0.132mを測る。微細な炭化物が確認されたが、土坑中央の検出面に少量出土するのみであった。

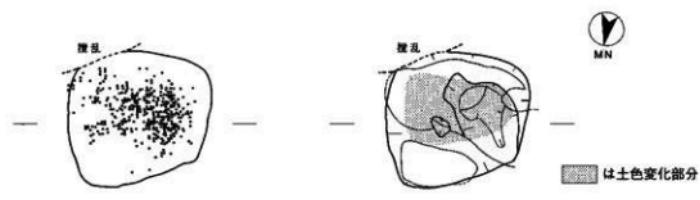
第23表 IV層状面検出土坑計測表

(単位:cm)

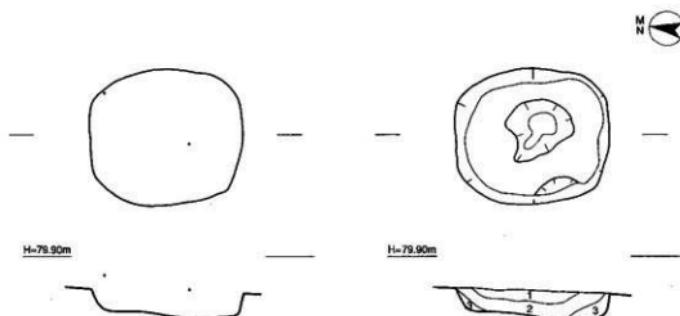
土坑番号	検出番号	検出区	検出層	長径	短径	深さ	平面形	備考
土坑2	第42回	B-C-14区	IV層上面	93.0	89.0	20.6	橢円形	埋土に炭化物を多含
土坑3	第43回	B-18区	IV層上面	58.0	57.5	23.0	橢円形	埋土に炭化物を多含
土坑4	第43回	B-20区	IV層上面	62.0	52.0	13.2	橢円形	埋土に炭化物を少含む



第42図 浜場遺跡 土坑2 平面・断面図



土坑 3



土坑 4
 1 黒色 (25Y2/1) 土 パミスの遺じりが見られない。
 2 黒色 (NOV2/1) 土 層の様子は層に似るが、やや締まった層。
 3 黒色 (NIS2/0) 土 2層よりもやや締まった層。若干の光沢有り。

土坑 4

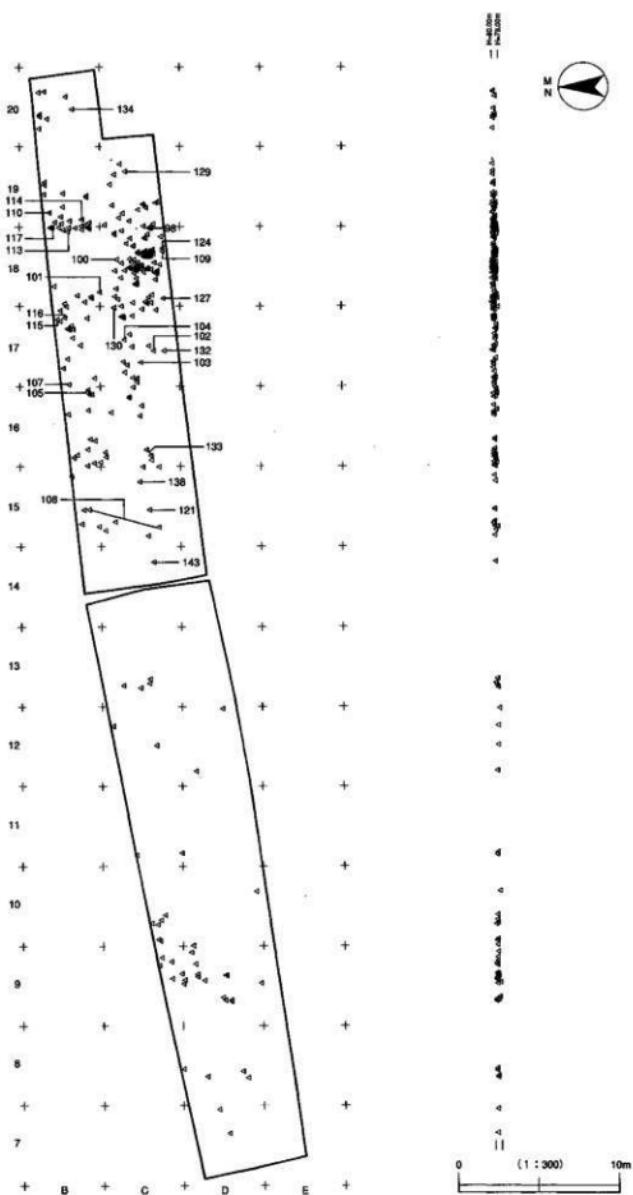
0 (1 : 20) 50cm

第43図 浜場遺跡 土坑 3・4 平面・断面図

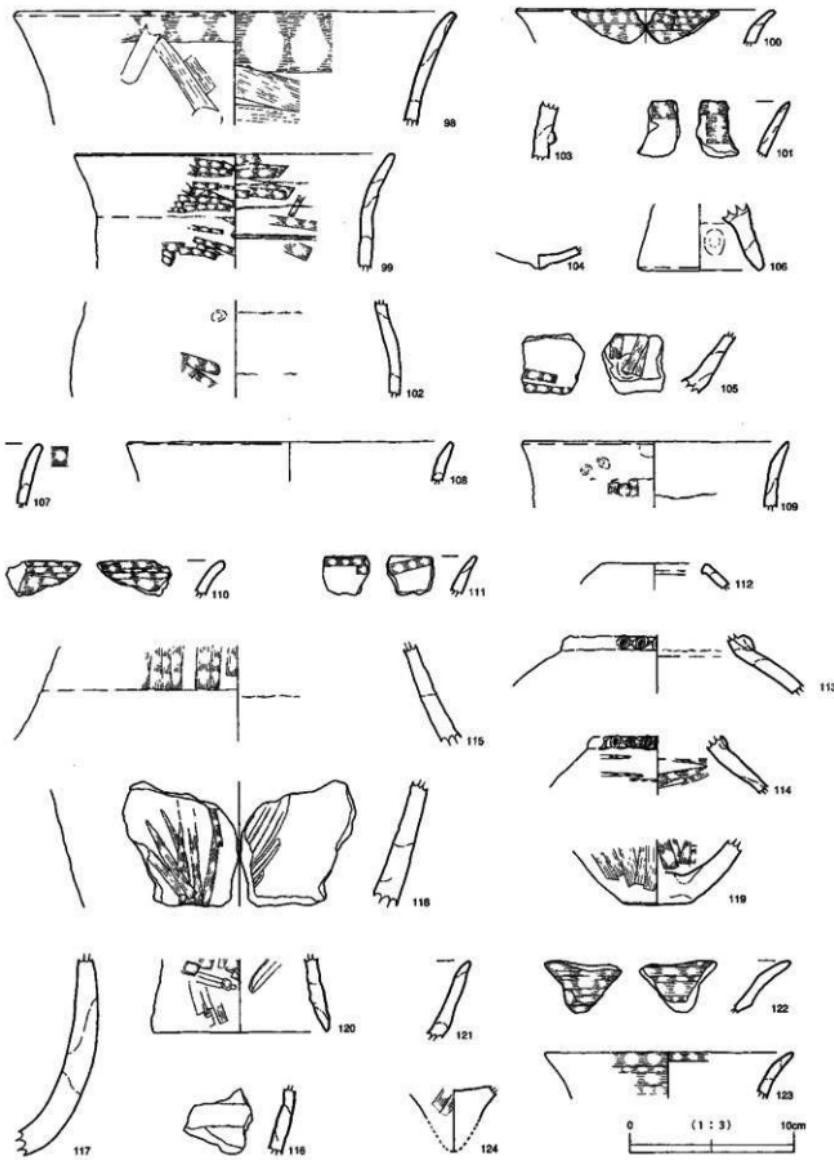
III層・IV層出土 成川式土器

III・IV層より成川式土器は271点出土し、うち接合遺物を含む36点を実測・図化（第45・46図）した。遺物分布はB-15~20区、C-9~19区、D-7~9・12区の広範囲から確認され、特に調査区の東側にあたるB・C-18・19区に分布が集中し、調査区の西側は出土分布の密度が疎になる傾向であった。（第44図）

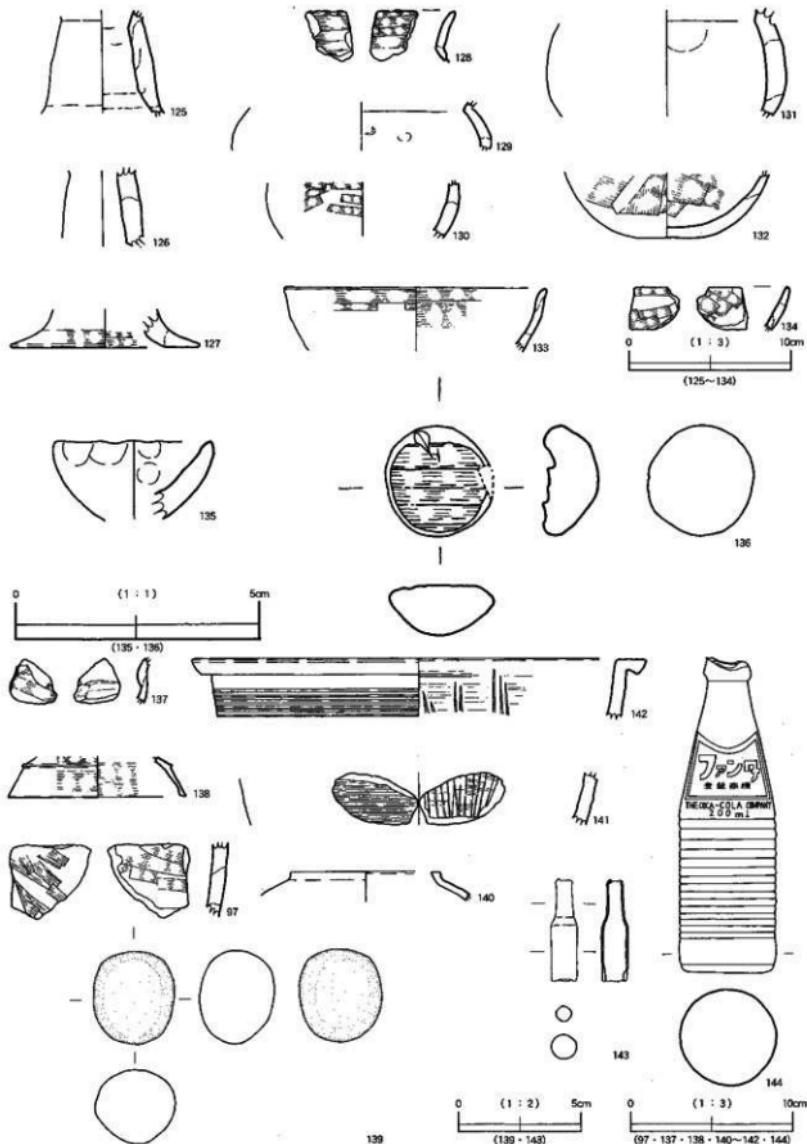
98~106は壺と思われる。98~101は口縁部が残存し、98・99・101はやや外反気味に反る。100は口縁端部で外反する。102は頸部から胴部が残存し、貼付突帯を持たない。比較的小型の壺と思われる。103は頸部が残存する。貼り付けた突帯に浅い刻目をもち、その刻目は指頭を軽く押圧したように施されたと思われる。104・105は底部が残存する。104は東原式土器に見られるような微小な底部をもつ。106は脚部が残存する。脚はやや外反気味に作出されている。器壁の調整が疎で歪である。107~120は壺と思われる。107~112は口縁部が残存し、107~109はやや外反気味に反る。109は器壁の調整が疎で歪である。110は外反する。111はほぼ直行する。112は極端に短頸の口縁部と思われ、外面に赤色塗布が認められる。113・114は頸部から胴部が残存する。頸部に貼り付けた刻目突帯をもち、その刻目は布目压痕と思われ、棒状の道具に布を巻いて押圧したものと思われる。115・116は胴部が残存し、115は胴部に未調整の低い段を残す。116は内面に積上げの接合痕が意図的に残る。117~119は胴部から底部が残存する。117は他の遺物とは異なり、胎土が微細で器面もザラつきが感じられることから、化粧土等を塗布することを前提に作られたものと思われる。118は胴部がやや内湾する。119は胴部がやや内湾し、底部は丸底に近い。120は脚部が残存する。脚はほぼ直行し、作出されている。器壁の調整が疎で歪である。121~126は高杯と思われる。121~123は口縁部が残存する。121は口縁部がやや内湾する。122は口縁部が外反し、胴部外面が「く」字状に屈曲する。123は口縁部が大きく外反する。124~127は脚部が残存する。124は脚部と坏部を繋ぐ突起部分である。125は脚がほぼ直行し、脚部下位は緩やかに外反するよう見える。126は125と同様に脚がほぼ直行し、胎土に含まれる砂粒や小礫が他の遺物よりも多含であり、土器の色調も異なることから搬入品の可能性が考えられる。127は脚の底部であり、大きく外反し、端部は丸くおさまる。128~132は壺と思われる。128は口縁部が残存し、わずかに外反する。129・130は胴部が残存し、129は外面に赤色塗布が認められる。131・132は頸部から胴部が残存する。131は頸部から底部までが比較的幅狭で、胴部が極端に低いように思える。また胎土に含まれる鉱物が他の遺物と比べても密であり、搬入品の可能性も考えられる。132は壺の底部であり、器壁も比較的薄い。133は坏の口縁部と思われる。口縁部が内湾し、口縁端部で外反する。須恵器の坏の器形を模倣したものと思われる。134は椀形土器の口縁部と思われ、緩やかに内湾する。135はミニチュア土器の口縁部であり、口縁部を内湾し、手捏ねで調整し器形は歪である。136は胎土の様子から成川式土器群に分類した。胎土を梢円形に成形し、その一面をヘラ状の工具で横引きに浅く段を洗濯板状に作っている。使用用途等不明である。



第44図 浜場遺跡 成川式土器 遺物出土状況全体図



第45図 浜場遺跡 成川式土器



第46図 浜場遺跡 成川式土器・土篩器・須恵器・石器・近世陶器・現代遺物

III層出土 土師器・須恵器

土師器が1点（137）、須恵器が1点（138）のみ出土し、それぞれC-15区、C-19区より出土し、その2点を実測・図化（第46図）した。分布の傾向は出土量が少ないと認め、判断が困難である。

137は土師器であり、壺の頸部から胴部が残存する。器形の調整も指頭圧痕が目立ち、内面の器壁は歪である。138は須恵器であり、壺蓋の口縁部が残存する。口縁端部が平坦で、胴部外面に段を有する。胎土が小豆色を呈し、初期須恵器の可能性が考えられる。

III層出土 石器

III層中から石器は1点（139）のみ、C-18区で出土した。その1点を実測・図化（第46図）した。139は砂岩製の磨石である。比較的小振りで、形状は俵型で研磨による磨耗面が所々に見られる。また上部に磨耗面を伴う僅かな凹みが見られる。

3 その他

古墳時代以降の遺構は確認できなかったが、III層及び搅乱層より近世陶器の出土が認められた。また表土層遺物ではあるが現代遺物として2点（143・144）を実測・図化（第46図）した。

近世陶器

近世陶器はIII層出土が1点（140）のみであり、C-18区より出土した。その他搅乱層出土の2点（141・142）を実測・図化（第46図）した。

140～142は近世陶器である。140は無頸壺の口縁部と思われ、口縁端部が平坦で、その外面に軸の攝取痕が見られる。141・142は苗代川系薩摩焼の擂鉢である。141は胴部が残存し、内面に串目が5条の単位で刻まれている。142は口縁部が残存し、口唇部が肥厚し、口唇の平坦面に軸の攝取痕が見られる。内面に串目が5条の単位で刻まれている。

現代遺物

143はキセルの吸口である。表面に緑青が付着しており、その直径は最大で1.05cmを測る。144は南九州コカコーラボトリング株式会社製と思われる200mlファンタの瓶である。口唇部が欠けている以外はほぼ完形である。アルファベット表記面の下位に「39 Y 71」とあり、1971年の製造瓶である。南九州コカコーラボトリング株式会社において、ファンタの製造が1963年5月9日より行われ、その第1号が宮崎県えびの市の「グリーンパークえびの」に展示してあり、瓶の形状・質感は今回調査で確認された遺物とほとんど変わりがみられない。

第VI章 浜場遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 土坑2出土の炭化材分析

(1) 樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、B・C-14区検出の土坑2の埋土から採取された炭化材2点である。

3 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（粋目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科（図版1）

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イダイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強韌、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

散孔材 diffuse-porous wood (図版2)

横断面：小型の道管が散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅ぐらいである。

以上の形質より散孔材に同定される。ヒサカキ属、ハイノキ属、ガマズミ属に類似する点も見られるが、試料が小片で広範囲の観察が困難なため、散孔材の同定にとどめた。

5 所見

樹種同定の結果、土坑2の埋土から採取された炭化材は、コナラ属アカガシ亜属および散孔材と同定された。コナラ属アカガシ亜属は、温帯下部の暖温帶の照葉樹林を形成する主要高木であり、散孔材についても暖温帶域に生育する広葉樹とみなされる。いずれも、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

(2) 放射性炭素年代測定

1はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。

2 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	B-C-14区, 土坑2埋土, No.285	炭化材(散孔材)	acid/alkali/acid	AMS
No.2	B-C-14区, 土坑2埋土, No.638	炭化材(アカガシ亜属)	acid/alkali/acid	AMS

acid/alkali/acid : 酸-アルカリ-酸洗浄

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	曆年代(較正年代) (2σ : 95%確率, 1σ : 68%確率)
No.1	243993	1620±40	-25.8	1610±40	交点: Cal AD 420 2σ : Cal AD 380-550 1σ : Cal AD 410-460, 480-530
No.2	243994	1630±40	-26.7	1600±40	交点: Cal AD 430 2σ : Cal AD 390-550 1σ : Cal AD 410-540

BP : Before Physics (Present), Cal : Calibrated, BC : 紀元前, AD : 紀元後

①未補正 ^{14}C 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5,730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

② $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

③ ^{14}C 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。曆年代較正にはこの年代

値を使用する。

④曆年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。曆年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線（IntCal04）を使用した。

曆年代の交点は、¹⁴C年代値と較正曲線との交点の曆年代値を示し、 1σ （68%確率）と 2σ （95%確率）は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

4 所見

加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では 1610 ± 40 年BP（ 2σ の曆年代でAD380～550年）、No.2の炭化材では 1600 ± 40 年BP（AD390～550年）の年代値が得られた。これらの試料は、ほぼ同一時期のものと考えられる。

第2節 土坑3出土の炭化材分析

（1）樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、B-18区検出の土坑3内の埋土から採取された炭化材1点である。

3 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

分析の結果、クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.（図版3）と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が數列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放

射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30m、径 2m に達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸など広く用いられる。

5 所見

樹種同定の結果、土坑 3 内から採取された炭化材は、クリと同定された。クリは、温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、暖温帶と冷温帶の中間域では純林を形成することもある。乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

(2) 放射性炭素年代測定

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤、土器付着炭化物などが測定対象となり、約 5 万年前までの年代測定が可能である。

2 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	B-18 区、土坑 3 墓土、No.130	炭化材（クリ）	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3 測定結果

試料名	測定 No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年 BP)	層年代 (較正年代) (2σ : 95% 確率、 1σ : 68% 確率)
No. 1	255865	1740 ± 40	-26.2	1720 ± 40	交点 : Cal AD 330 2σ : Cal AD 230-410 1σ : Cal AD 250-390

BP : Before Physics (Present), Cal : Calibrated, AD : 紀元後

①未補正 ^{14}C 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5,730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いている。

② $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

③¹⁴C年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

④暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づくことができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線（IntCal104）を使用した。

暦年代の交点は、¹⁴C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し、 $1\sigma^{\pm}$ （68%確率）と 2σ （95%確率）は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の $1\sigma + 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

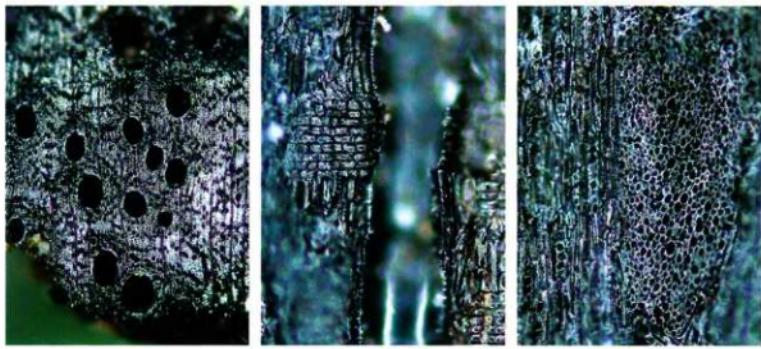
4 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№1の炭化材では1720±40年BP（ 2σ の暦年代でAD230～410年）の年代値が得られた。

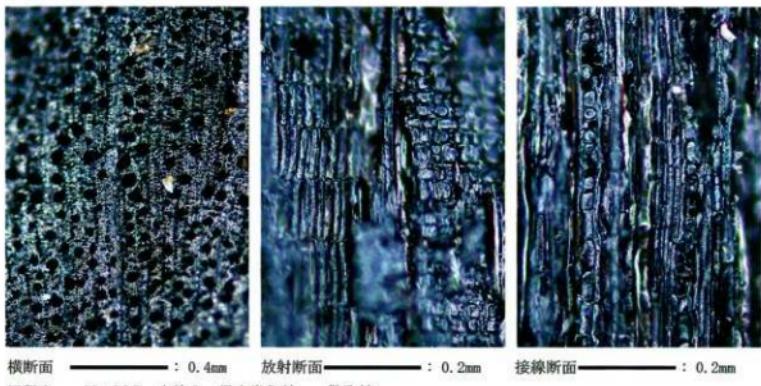
【参考文献】

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松賴生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版、290p.
- 島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、296p.
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p.
- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
- 尾崎大真（2005）INTCAL98 から IntCal104へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－, p. 14-15.
- 中村俊夫（1999）放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院。p. 1-36.

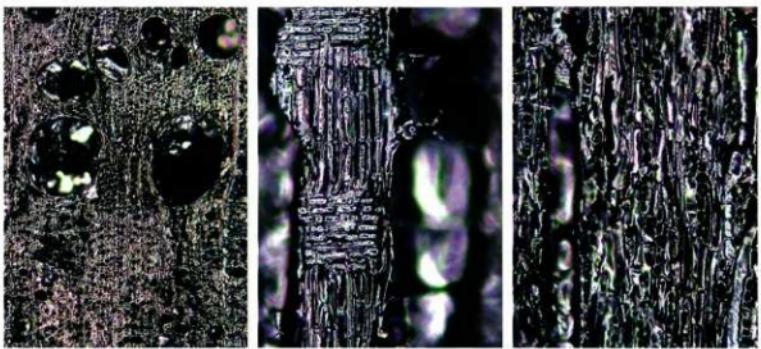
写真1 浜場遺跡の炭化材



横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
図版1. No.638 土坑2 埋土炭化材 コナラ属アカガシ亜属



横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
図版2. No.285 土坑2 埋土炭化材 散孔材



横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
図版3. No.130 土坑3 埋土炭化材 クリ

第VII章 下堀遺跡 確認調査の概要

第1節 確認調査の方法

確認調査は、遺跡の性格と範囲を把握するために、事業対象区域内の任意の地点に4トレンチを設定して実施した。下堀遺跡は既設舗装道路の拡張部分の調査であり、掘削範囲が狭く、トレンチの規模は1m×3mを基準とした。調査員立会いのもと表土、火山灰層を除去した後、作業員による掘り下げを行った。包含層の残存状況は全体的に良好であったが、一部で削平が見られた。

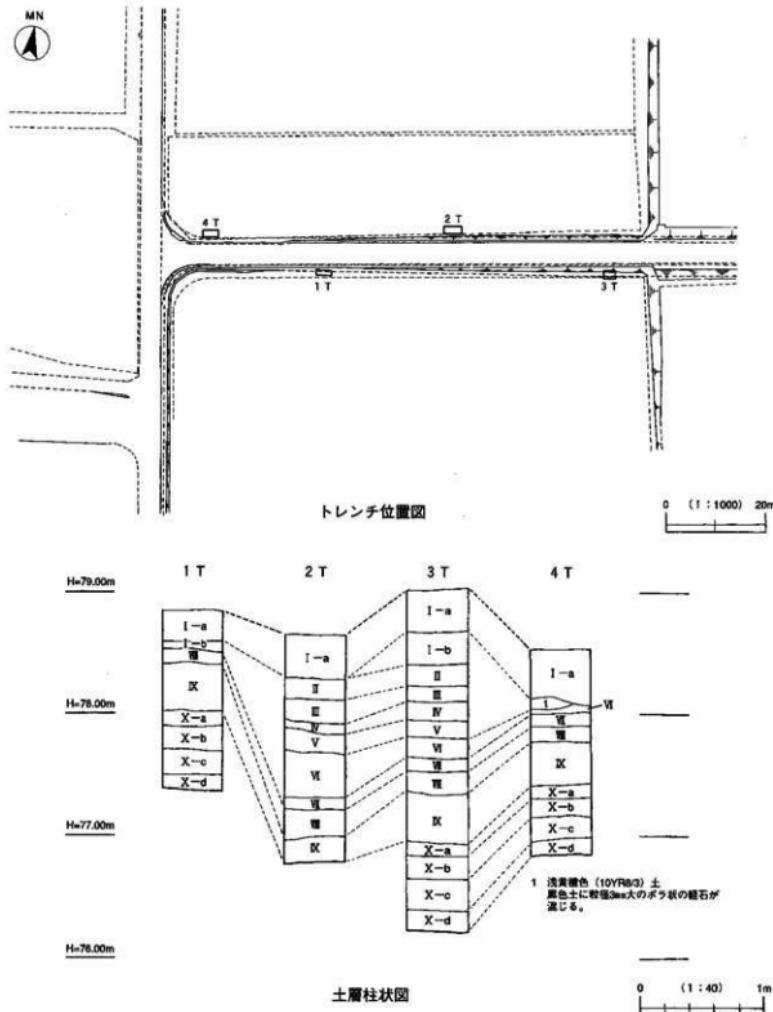
第2節 層位

確認調査時の標準土層は下記のとおりである。

層位	七色	土質・特徴
I-a層	暗オリーブ灰色 [2.5GY4/1]	表土層。層中に灰白色 [7.5Y8/1] テフラ (直径1~10mm程度) を多含する硬質土層。
I-b層	オリーブ黒色 [10Y3/1]	旧耕作土。層中に灰白色 [7.5Y8/1] テフラ (直径5~10mm程度) を含む縮まった層。
II層	黒色 [N1.5/0]	層中ににぶい黄橙色 [10YR7/4] パミス (直径2~4mm程度) が層全体に浮遊する縮まった層。
III層	黒色 [2.5GY2/1]	層中にテフラ・パミスの類を含まない縮まった層。
IV層	黒色 [5Y2/1]	層の様子はIII層に似るが、比較的層色が明るい硬く縮まった層。
V層	黒色 [10Y2/1]	層の様子はIV層に似るが、層色が比較的に濃く縮まった層。
VI層	黒色 [7.5Y2/1]	層中に明黄褐色 [10YR7/6] パミス (直径2~3mm程度) を含む縮まった層。
VII層	黒色 [N2/0]	層中にテフラ・パミスの類を含まず、湿り気のある縮まったく層。
VIII層	黒褐色 [2.5Y3/2]	通称 池田湖テフラ層 (1k)。黄橙色 [10YR6/8] テフラを層の上位にわずかに含み、その下位は粘性をもつ硬く縮まったく層が堆積する。
IX層	明黄褐色 [10YR6/8]	通称 鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah)。かなり硬く縮まる層。層の下位に黄橙色 [7.5YR7/8] テフラ (直径2~10mm程度) が層を成す。
X-a層	黒色 [7.5Y2/1]	層中にテフラ・パミスの類を含まない硬く縮まったく層。
X-b層	オリーブ黒色 [5Y3/1]	層中に明黄褐色 [10YR6/8] パミス (直径2~5mm程度) が層全体に浮遊するように多含する硬く縮まったく層。
X-c層	オリーブ黒色 [5Y2/2]	層の様子はX-b層に似るが、層中に含まれる明黄褐色パミス (10YR6/8) が大きく比較的硬い層。
X-d層	暗オリーブ色 [5Y4/3]	層色がX-c層と比べて明るくなり、層中に明黄褐 [10YR6/8] 色パミスをわずかに含む層。
X I層	黄褐色 [2.5Y5/3]	通称 サツマ火山灰層 (Sz-S)。かなり硬化して縮まったく層。層の上位にサツマ火山灰層の2次堆積が一部見られる。

第3節 確認調査の概要

確認調査の結果、遺物・遺構ともに確認されず、事業対象区域内に遺跡は存在しないことが判明した。



第VII章 浜場遺跡・下堀遺跡 調査のまとめ

はじめに

浜場遺跡・下堀遺跡は県営半島基幹農道整備事業 草野2期地区に起因する農道整備事業により平成19年度に確認調査、全面調査を実施した遺跡であるが、これらの遺跡の隣接地を同事業の草野地区の事業対象区域においても、同様に浜場遺跡・下堀遺跡を平成11年度に確認調査、平成14年度に全面調査を実施した。前地区的調査では、浜場遺跡は縄文時代早期の石器製作跡、下堀遺跡は縄文時代早期の炉穴下部の「シミ状痕跡」が遺跡の特徴として確認されている。

第1節 浜場遺跡 遺物

(1) 土器

土器は第V章で述べたとおり、大別して古墳時代・縄文時代早期の遺物が確認されている。古墳時代の土器に関しては主に成川式土器が主であり、辻堂原式から笹貫式にかけての土器型式の特徴を持つことから、古墳時代中期末頃から後期にかけての遺物が確認されたことになる。縄文時代早期の土器に関しては、全体的な出土点数は少ないものの、縄文時代前期葉から後葉末にかけての時期にかけての遺物が確認され、出土遺物数から、第V群（塞ノ神Aa式）から第IV群（苦浜式）にかけて遺物の出土数が多く比較的遺物の残存状況が良いものが確認されていることから、縄文時代早期後葉から末にかけての居住に伴う遺構が近隣に存在する可能性がある。

(2) 石器

縄文時代早期相当の遺物包含層から出土した石器については、OB8類に分類される黒曜石と黒色安山岩製の遺物が大半であり、OB8類に分類される黒曜石については、D・E-7区において約3mの範囲からOB8類に分類される黒曜石の石質の石器・剥片を含んだ密な分布が確認されていることから、平成14年度の調査成果と同様に石器製作場が存在した可能性がある。

第2節 浜場遺跡 遺構

IV層上面で検出された土坑2・土坑3の炭化物の自然科学分析の結果については第VI章に述べている。この2つの土坑から得られた放射性炭素年代測定の結果を比較すると、土坑2の同遺構内に確認された2点の炭化材についてはサンプルNo.1が2σの曆年代でAD380～550年、サンプルNo.2が2σの曆年代でAD390～550年の結果が得られた。この2点のサンプルについては十坑埋土内に確認された硬化面の上下で確認されたものであるが、ほぼ同一時期の試料であり、硬化面の形成を伴う複数時期の使用については、ほとんどの差異がない事がわかった。土坑3の炭化材については2σの曆年代でAD230～410年であり、土坑2と土坑3の使用時期については2σの曆年代でAD390～410年の間に交点が得られ、土坑2・土坑3についてはほぼ同一時期に使われた可能性がある。また、IV層上面で検出された溝1は、遺構床面及び遺構埋土内に少量ながら成川式土器が確認されていることから、使用年代は古墳時代以降であることが考えられる。その使用意図については、土層の堆積状況についても幅の広い溝状遺構部分（第34図）と、そこに交差する4トレンチA-

A'面（第37図）を見る限りでは層がレンズ状に堆積しているのが確認でき、その直下に広く硬化面が形成されていることから道跡の使用が考えられる。しかし2条の細い溝状遺構については遺構の掘り込みが上層の擾乱により僅かに確認できる状態であった。残存する遺構内埋土を観察しても土砂の流入を示す層の堆積は見当たらず、底面の高低差についても一定の状況が見られない事から水利に伴う遺構の可能性は低いと考えられる。また遺構の底面で確認された直径10~15cm程度の浅い柱穴状遺構について牛馬の足跡痕を伴う道跡が考えられたが、底面及び柱穴状遺構に硬化面の形成が見られず牛馬の足跡痕の確認は得られなかった。

IX-b層上面で確認された集石及び炭化物集中地点について、遺構埋土内には時期を示す遺物が確認されなかつたため使用時期は、遺構を巡る遺物の出土状況に関連性を見いだされると思われ、集石1・2・3の付近には第V群（塞ノ神Aa式）、炭化物集中地点3の付近には第VI群（塞ノ神Bd式）、炭化物集中地点1の付近には第IV群（手向山式）、炭化物集中地点2の付近には第VII群（苦浜式）の土器がそれぞれ確認されていることから、3区で確認されたIX-b層上面検出遺構は、ほぼ縄文時代早期後葉に使用されたものと考えられる。

平成14年度調査成果との遺物・遺構分布の傾向

この遺跡の立地は舌状に延びる台地末端の根元にあたり、今回の全面調査における古墳時代の遺物包含層はその台地末端の根元中央に存在する。平成14年度の調査では遺物・遺構とも調査区中央部を除くほぼ全域に、掘立柱建物・柱列を含む遺構群及び成川式土器を中心とした分布が確認されている。また同様に縄文時代早期の遺物は、田原川を眼下に望む台地の東端部に炉穴・土坑・散石群を含む遺構群及び出土数は少ないが辻タイプ・塞ノ神式・石坂式・下剥峯式の縄文時代早期の土器と多量の石礫・剥片の分布が確認されている。

今回の全面調査において、古墳時代の遺物包含層及び遺構は、調査区の東側にその分布の傾向があることは前述したとおりであるが、平成14年度の調査結果と照らし合わせた場合、比較的に平成14年度調査の成川式土器の遺物分布が疎であり、今回の全面調査地のC-18区を中心に密な出土分布が見られることから、浜場遺跡における古墳時代の遺跡地は、舌状に延びる台地末端の中央付近にあることが考えられる。また縄文時代早期の分布は、いずれも台地の東端と西端にそれぞれ位置し、遺構の分布についても散石・集石を伴った点は類似の傾向があるように思える。

第3節 下堀遺跡まとめ

今回の確認調査においては遺物・遺構とも確認されなかつたが、平成14年度の発掘調査の成果から、より田原川に近い台地の西端には埋蔵文化財が包蔵されている可能性は高く、今後の調査によって下堀遺跡の全容を把握することも可能と思われ、今後の試料の増加と検討が必要と思われる。

【参考文献】

- 『鹿大考古 第6号 成川式土器再考』 中村直子 1987 鹿児島大学考古学会
『日本土器辞典』 大川 清・鈴木公雄・公乗善通 1996 雄山閣
『新編 火山灰アトラス—日本列島とその周辺』 町田洋・新井房夫 2003 東京大学出版会
『上野原遺跡（第10地点）』 中村耕治・井ノ上秀文・富田逸郎・八木澤一郎 2001
鹿児島県立埋蔵文化財センター
『上野原遺跡（第2～7地点）』 森田郁朗・今村敏照・中村和美・黒川忠弘 2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター
『城ヶ尾遺跡』 有馬孝一・馬籠亮道・較島伸吾・真鍋雄一郎・長野寅一 2003
鹿児島県立埋蔵文化財センター
『桐木耳取遺跡』 長野寅一・大保秀樹・松尾勉・野間口勇・八木澤一郎・岩戸孝夫・元田順子・
真鍋雄一郎・馬籠亮道・較島信吾・山元真美子 2005 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『上野原遺跡（第10地点）』 中村耕治・繁昌正幸・井ノ上秀文・富田逸郎・森田郁朗・東和幸・
八木澤一郎・東林文夫 2000 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『9日田遺跡』 井ノ上秀文・宇都俊一 2002 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『供養之元遺跡』 野邊盛雅・山崎克之 2002 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『前原和田遺跡』 大保秀樹 2002 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『桐木遺跡』 中原一成 2004 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『三角山遺跡群（2）』 藤崎光洋・大久保浩二・上床真 2004 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『三角山遺跡群（3）』 藤崎光洋・中村和美 2006 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『仁田尾中 A・B 遺跡』 長野寅一・國師洋之・馬籠亮道 2007
鹿児島県立埋蔵文化財センター
『関山西遺跡』 遠矢勝幸・永濱功治 2008 鹿児島県立埋蔵文化財センター
『熊毛諸島の縄文早期土器の一型式—苦浜式土器の認定—』 堂込秀人 1994
考古学ジャーナル
『南九州貝殻文系土器 I～鹿児島県～』 黒川忠広 2002 南九州縄文研究会
『横峯遺跡』 倉元良文・堂込秀人・成尾英仁 1993 南種子町教育委員会
『大中原遺跡』 下大川司・前追亮一 2000 根占町教育委員会
『佐明遺跡』 中水忍・出口順一朗・堂込秀人・前追亮一・横手浩二郎・和田るみ子・東徹志 2005
有明町教育委員会
『横堀遺跡』 中水忍・東徹志・出口順一朗・堂込秀人 2005 有明町教育委員会

図 版

図版1 浜場遺跡 試掘調査 浜場遺跡・下堀遺跡 確認調査



浜場遺跡 確認調査 2T 北壁土層断面



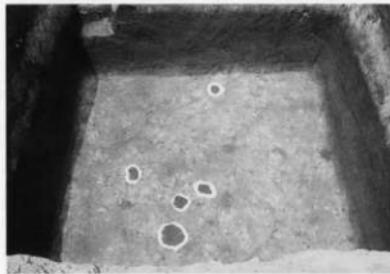
浜場遺跡 確認調査 5T 北壁土層断面



浜場遺跡 確認調査 2T 土坑2検出状況



浜場遺跡 確認調査 5T 破出土状況



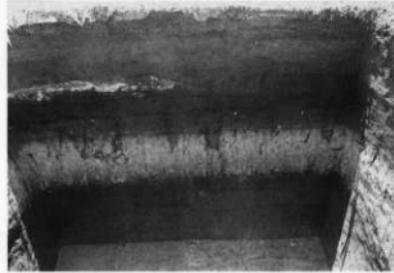
浜場遺跡 確認調査 4T X層上面 遺構検出状況



浜場遺跡 試掘調査 4T Ⅲ層遺物出土状況



下堀遺跡 確認調査 3T 西壁土層断面



下堀遺跡 確認調査 4T 西壁土層断面

図版2 浜場遺跡 集石



集石 1・2・3 梠出状況



集石 1 梠出状況



集石 2 梠出状況



集石 3 梠出状況

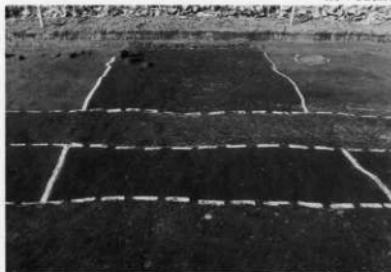


集石 4 梠出状況

図版3 浜場遺跡 溝1



溝1完掘状況（全体）



溝1検出状況（一部）



溝1完掘状況（一部） 1



溝1完掘状況（一部） 2



溝1完掘状況（一部） 3

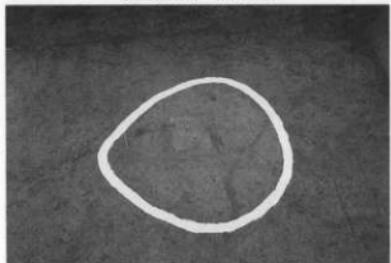
図版4 浜場遺跡 掘立柱建物・土坑



掘立柱建物 1 検出状況



掘立柱建物 1 完掘状況



土坑 2 検出状況



土坑 2 完掘状況



土坑 3 検出状況



土坑 3 完掘状況



土坑 4 検出状況



土坑 4 完掘状況

図版5 浜場遺跡 遺物出土状況・土層断面



3-1区 IX-a層遺物出土状況



3-2区 IX-a層遺物出土状況



VII群 (44) 土器出土状況



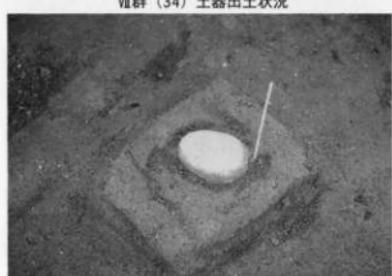
2区南壁土層断面



VII群 (34) 土器出土状況



1-3区西壁土層断面

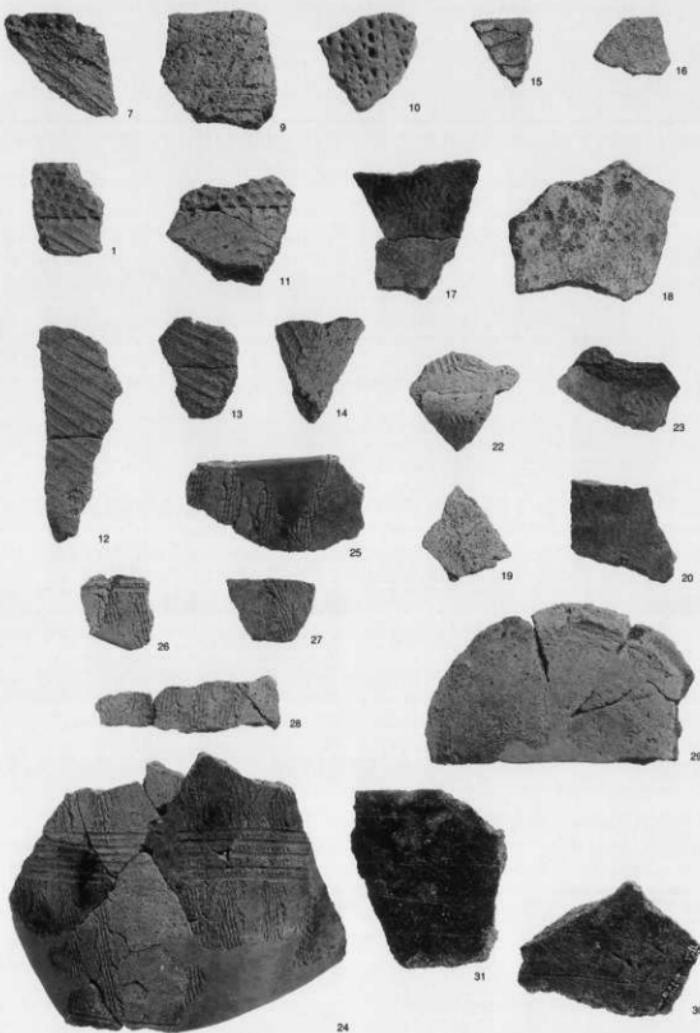


磨石 (94) 出土状況

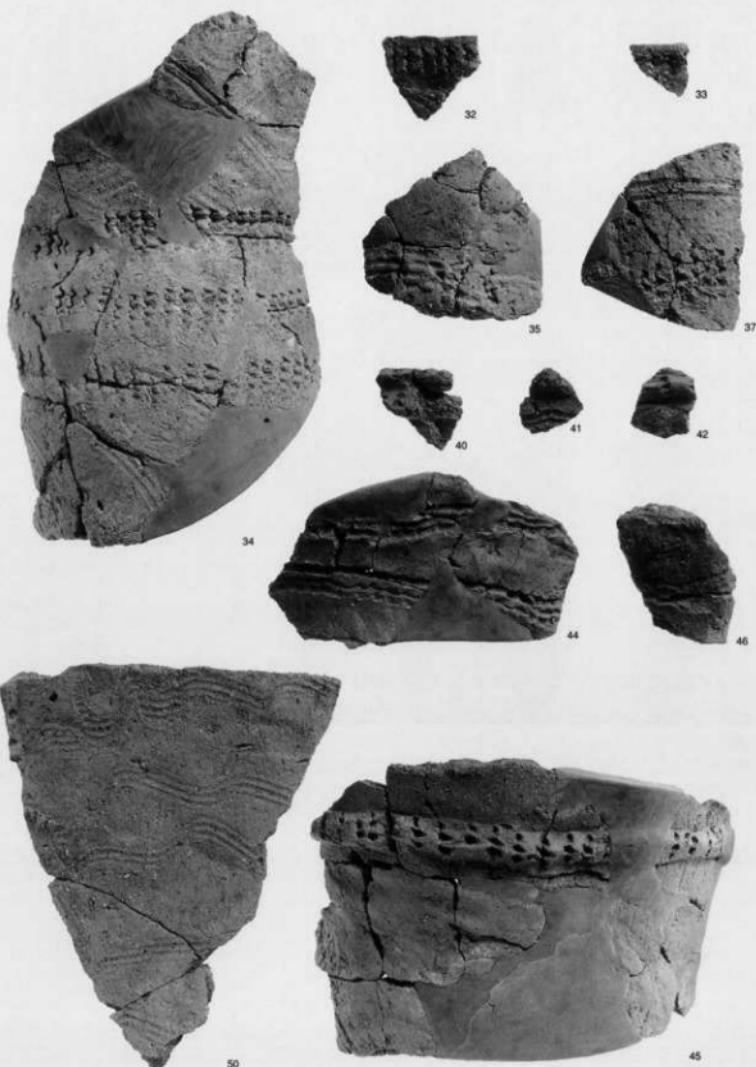


3区西壁土層断面

図版6 浜場遺跡 繩文早期土器（I～VI群）



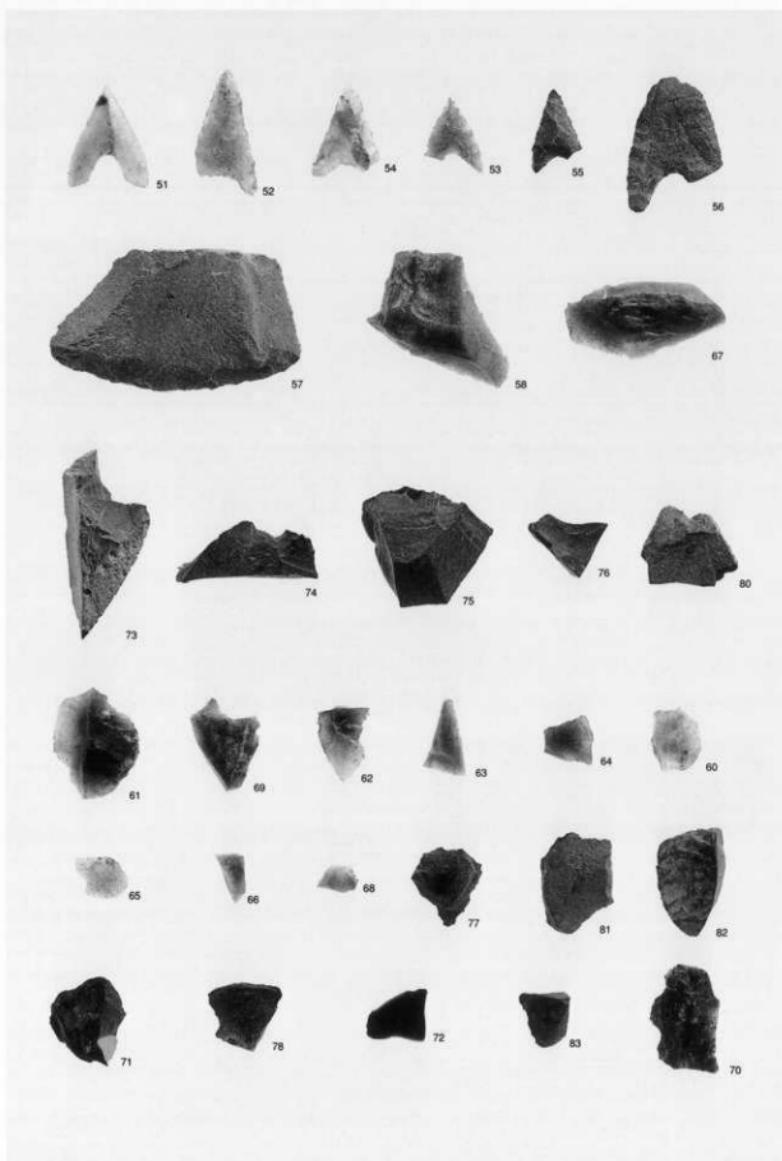
図版7 浜場遺跡 繩文早期土器（VII～IX群）



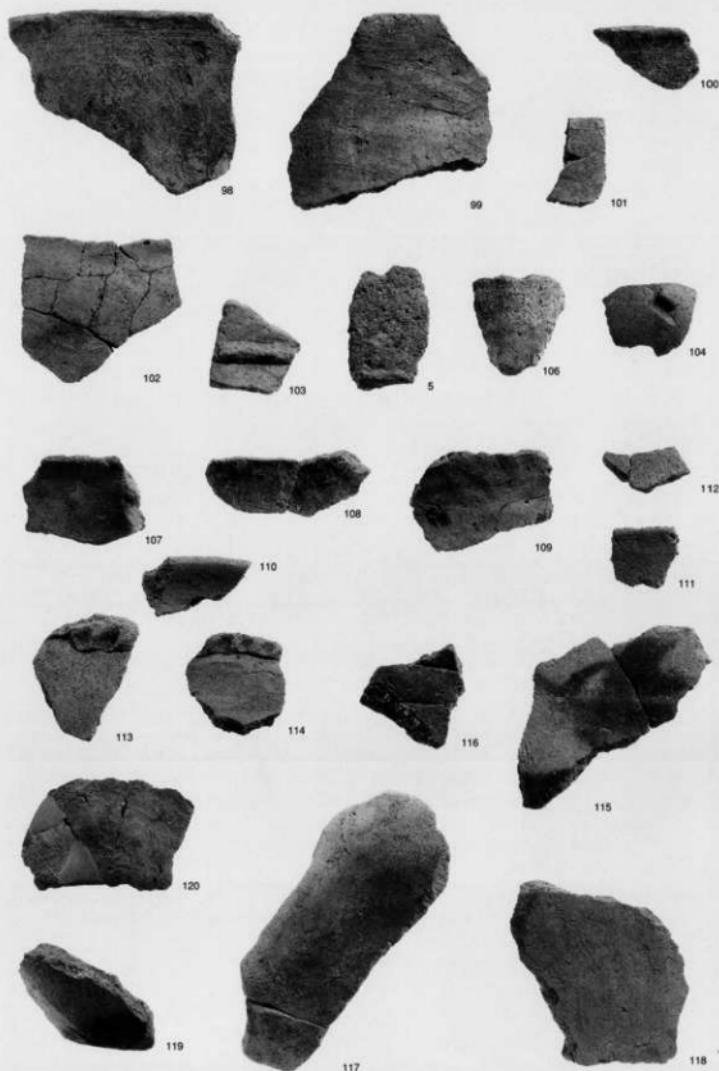
50

45

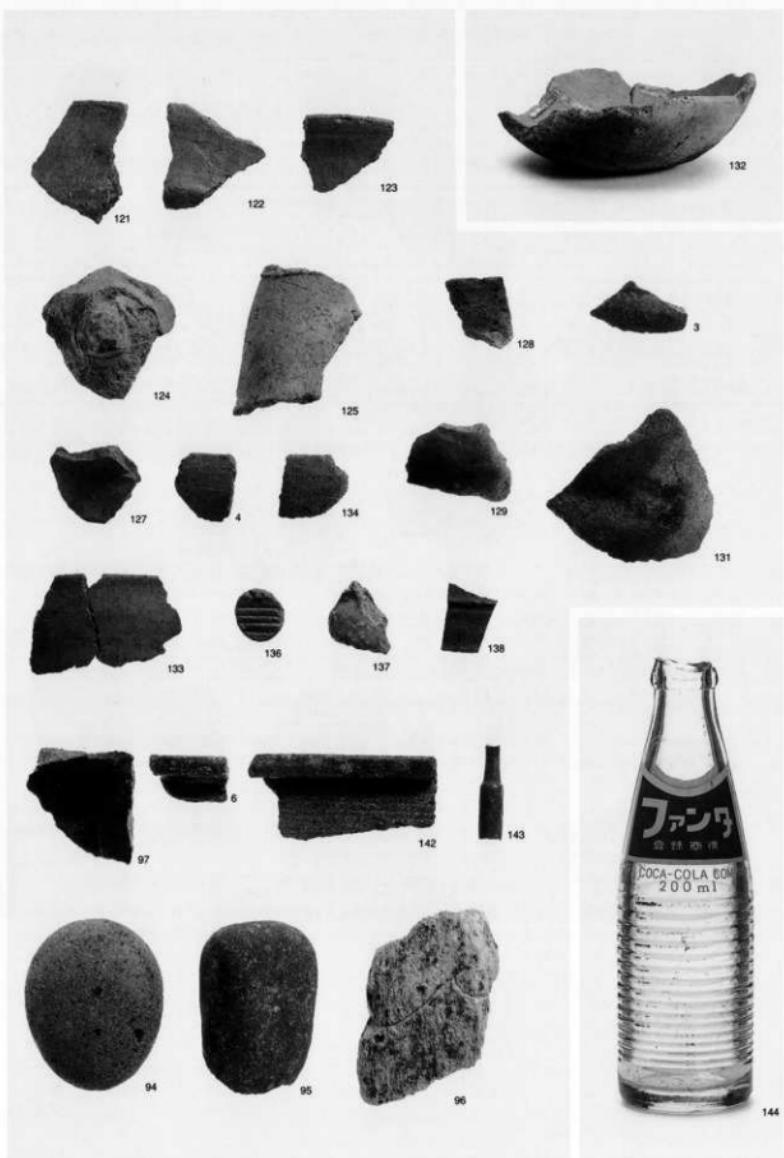
図版8 浜場遺跡 IX-a層出土 石器



図版9 浜場遺跡 成川式土器



図版10 浜場遺跡 成川式土器・土師器・須恵器・石器・近世陶器・現代遺物



報 告 書 抄 錄

おわりに

平成19年度。志布志市は南国であり、世は地球温暖化が叫ばれる中、朝現場に出てみると厚い霜柱が現場一面を覆い、日陰の霜は削ってもまた再生してくる。11月から着手して、越冬の現場運営でした。調査にあたり調査地周囲の畠地を耕作される方々の多大なるご協力をいただき、無事に調査が3月に終了。気付けば周りの風景は春の彩りを迎えようとしていました。

現場で埋蔵されている遺物・遺構に向かい合っているうちに、自然は少しずつ春を迎える準備をしていた。その自然の中に埋蔵された遺物・遺構を自然の中で調査し、現場を間もなく終えようとする中で、春の息吹と祝福を感じ、励まされたことを思い出します。

いずれは寿命と共に土に返る身であることは当然のことですが、そのときは土に返り自然の中に同化して、自然の一部となって周りを励ます存在になりたいものだと思います。

結びに、確認調査、全面調査、整理作業、報告書作成に携わってくれた作業員や臨時職員のみなさん、その他関係してくださった皆様にこの場をお借りして謝意と賛辞を述べたい。本当にありがとうございました。

(30代最後の春に… J.D.)

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

浜場遺跡・下堀遺跡 (草野2期地区)

発行日：2009年2月27日

発 行：鹿児島県志布志市教育委員会

〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号

TEL 099-472-1111

印刷所：西文社印刷株式会社 志布志支店

〒899-7103 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目16番21号

TEL 099-471-1328